セブンス・マーチャント

久楽美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セブンス・マーチャント

【Ｎコード】
Ｎ０８７２Ｗ

【作者名】
久楽美月

【あらすじ】
スロウとクロワはコンビを組んでもうすぐ一年が経とうとしていた。
怠け者のスロウと勤勉で努力を重んじるクロワ。
ドラゴンが圧倒的な力を持つ世界で、凸凹コンビは今日も『法具』を作るため、
大勢の人々を巻き込みながら、物語を紡いでいく。
ありそうでない。どこかで見たような王道ファンタジー……になる

予定

『怠惰の王』（前書き）

はじめましての方もそうでない方もこんにちは。
美月と申します。
今回はファンタジーを書いてみました。
初めて書いたものもファンタジーでしたが、
やっぱりファンタジーが好きなようです。
拙い文章ではありますが、楽しんでいただけたらと思います。

『怠惰の王』

その時。
スロウは激しい火球の雨に打たれていた。
火球よりも赤い深紅のコートを翻し、両手に二本の刀を携えた黒い長髪の男は、
止むことのない灼熱の豪雨を必死に掻い潜りながら、苛立ちを募らせていた。
「グギャーーーー」
上空では赤褐色の『ドラゴン』が、その翼を広げ雄叫びをあげている。
「ああもう！　うるせえな、少しは静かにできないのかよ。ドラゴンて生き物はみんなこんなに騒がしいのか……おしとやかな奴がいたっていいじゃないか！」
スロウは火球を避け続ける。
当たれば生身の人間が生きていられるわけがない。
火球が大地を抉るたび、その形がめまぐるしく変貌する。
「スロウス様！　助太刀致します！」
遠くから甲冑の男たちが叫んでいる。めんどくさいが、無視をするわけにもいかない。
すれば、男たちは死の待つ戦場に足を踏み入れるかもしれない。
「あんたらはそこにいろ！　足手まといだ！」
長髪の男はドラゴンの猛攻を防ぎつつ、すぐそばにいる甲冑の男たちにも気を配る。
「ちくしょう、めんどくせえ……やっぱりドラゴンの相手はめんどくせえ」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

面倒くさい。

その一言は喜怒哀楽の一切を放棄する。

誰しもが一度は抱く、負の感情。

それに憑りつかれた一人の男がいた。

スロウス・アルカ・プラン

人は彼を『怠惰の王』と呼ぶ。

『怠惰の王』（後書き）

まずは、プロローグです。
最初はとても短いですが、たまに長い時もあるので気を付けてください。

『ライド・キエル・ギュスターヴ』

「……なるほどね。君の言いたいことはわかったよ。オーケー。『彼』に仕事を回してあげる。僕に任せておいて」

まだ少年の面影の残る男は、電話越しにそう告げると受話器を置き、バーテンのマスターにカウンター越しに古めかしい黒電話を渡す。が、すぐに思い立ったかのようにマスターの手から受話器を取り返す。

「ごめん、一か所、電話しなきゃならないんだった。もう一回貸してくれるかい？」

「ええ、かまいませんよ。おかわりはどうなさいますか？」

「同じものを頼むよ」

「先ほどの一杯でボトルが空になりましたが、同じものを新しくお入れしても？」

「ああ、よろしく」

「かしこまりました」

マスターが紫の短い髪が印象的な男のもとを離れると、男はある場所へ電話をかける。

「あ、もしもし？　姉さん？　僕だよ、僕。え？　違うよ『ボクボク詐欺』なんかじゃないってば！　キエルだよ。姉さんの可愛い弟じゃないか！　ちょっと！　ごめん切らないで！　僕の悪ふざけが過ぎたよ……。まったく……姉さんはすぐ怒るんだから」

ライド・キエル・ギュスターヴ

『セブン・マーチャンズ』の一人にして、

「セカンド」・「紫炎の獅子」の二つ名を持つ男。

紫の短い髪を小洒落た感じに跳ねさせ、装いはどこかビジュアルバンドのスターのように全身を黒のライダースと黒革のズボンで覆

っている。
「そう。それでさ、この前僕に来ていた依頼を『彼』に回して欲しいんだ。もちろん指名料は返金してもらってかまわない。彼には姉さんも興味あるだろ？　よろしくね」
電話の雰囲気からして姉弟の関係はそこそこ良好なようだった。ただ、少しばかり弟の好意の方が上回っているようではあった。
ライドは姉との回線が切れたのを確認するとゆっくりと受話器を置く。タイミングよくマスターが深紅で満たされたカクテルグラスをライドの前に置き、代わりに電話を受け取った。
ライドは一口飲むと、楽しげに口元を歪ませる。
「ふっ！　さてどうなることやら……これだから人間は面白いよな」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

私の朝は大体ここから始まる。
「コラー！　そこで遊んじゃ駄目だって言ったじゃない！」
「うげー！　魔王の嫁だー！　逃げろー」
「だーれが魔王の嫁だー！」
私が両手を上げて大声をあげると少年たちは楽しそうに走っていく。今逃げ出した憎たらしい三人組はこの辺に住む近所の子供たち。どうしてかわからないけど、ただのレンガ造りの『この家』の前で決まっていつも遊んでいる。
私は普段の一連の動作として軽く溜息をついた後ポストを覗く。『この家』の主はポストを決して見ないからだ。
「あっ！　きた！」
私は思わず声を上げる。そのトーンも普段に比べて上ずったものになったのが自分でもわかった。ポストの中身を掴むと職人の力作であろう木製の扉を勢いよく開く。広いリビングには木製の大きな

テーブルと四脚の椅子。そしてソファーベッドには黒い長髪を青のバンダナで抑え、赤い毛布を被った家の主が寝ていた。この男は一年のほとんどをこのソファーの上かどこかの喫茶店で過ごす。本当に何を考えているかわからない。
「朝から随分と騒がしいな……」
「またいつものガキたちよ……スロウこそいい加減起きたらどう？」
「めんどくせえ……」
声の主はこの家の主で、いちおう私の相棒。

スロウス・アルカ・プラン

通称スロウ。
理由は知らないけれど、スロウスと呼ばれるのは嫌みたい。
世界にたった七人しかいない『セブン・マーチャンズ』の一人であり、
二つ名は「セブンス」もしくは「双刀の猛牛」。
けど、世間がスロウにつけた呼び名は……

「起きたってなんもやる事ねえんだから寝ていていいだろ……」
「ふふーん！　実は今日は『協会』から依頼書が届いています！」
「……あ？」
「聞こえなかったの？　それとも聞こえてないフリ？　仕事の依頼が来たって言ったのよ？」
私は少し意地悪くスロウをからかって、依頼書の入った封筒をヒラヒラと振って見せる。
「……なんだって？」
どうやら聞こえなかったわけでも聞こえなかったフリをしていたわけでもなかったらしい。聞こえているけど、単純にその言葉が信じられず確認をとったみたい。自分に仕事が来る訳がないと思っているのだから本当に呆れてしまう。

どうして私はこいつの相棒なんかやっているのだろうと、たまに、いや、しょっちゅう考えてしまう。まあ、成り行きだ。巻き込まれてしまったものはしょうがない。と無理やり自分を納得させる。

スロウはガバッとソファーから起き上がると赤い毛布をマントのように羽織って、私の元へ近づいてくる。バシッと私の手から封筒を強引に奪うと乱暴に破り中身に目を通した。

「……めんどくせえ」

「ねえ。どんな依頼だったの？」

「……」

「ねえってばっ！」

「今日はもう動くのがめんどくせえ。明日また来い」

「明日って……今日まだ朝なんだけど？」

「うるせえな……明日って言ったら明日なんだよ」

そう言いながらスロウは私の背中を押して強引に家から追い出した。

「なんなのよ、もう！　この怠け者！」

スロウは本当に何を考えているかわからない。

『白騎士』

その日の正午。スロウは王国の外にいた。
『王国ホルン』から北に一〇キロ程進むと、『バルブ』という炭鉱がある。
標高約一〇〇〇メートルの比較的小さな山『バルブ山』。
その赤褐色の山肌に直径一〇〇メートルほどの空洞を開けただけのバルブ炭鉱は『一五年前』ドラゴンの群れに遭遇して以来、その巣窟と化している。
炭鉱の傍には、かつて使っていたであろう炭鉱道具や資材、炭鉱夫たちの住んでいた建物がボロボロに朽ち果て、そこかしこでみるも無残な姿をさらけ出すばかりだ。
「スロウス様。さすがに一人では危険かと思われます。我々も一緒に同行いたしましょう」
バルブ炭鉱の入口に止められた大型車両。その荷台からスロウが降りると中にいるかっぷくの良い騎士の一人が話しかけた。国外に出るときは必ず数名の騎士が同行することが世界協定で定められている。荷台には話しかけた騎士のほかに八人の騎士が並んで座っていた。
「必要ない。足手まといが増えるのはめんどくせえ。あんたらは別に帰ってもかまわないよ。待っているのもめんどくさいだろ？　その気持ちは俺にも理解できる」
「ですが、ここに巣食うドラゴンはこの辺でもかなりの強敵で……」
それでも騎士の方は食い下がる。彼らもこれが仕事だ。ドラゴンから人々を守るために騎士の仕事に就いたプライドがある。また、スロウが放った「必要ない」「足手まとい」という言葉に強い不快感を抱いていた。他の『セブン・マーチャンズ』ならまだしも、この男に言われる筋合いはない。と九人の騎士たちは心の中ではそう考えている。

簡単に言うと、騎士たちはスロウのことを見下していた。
「なら勝手についてくればいい。それと俺のことは『スロウス』じゃなくて『スロウ』と呼んでくれ」
「わかりま――」
騎士がそう言いかけたとき、
彼の眼はすでに彼らを標的として認識し、至近距離に迫っている『ドラゴン』を捉えた。
炭鉱と同じ赤褐色の鱗。
人間を何十人も束ねたような太い二本の脚。
広げることで全長一〇〇メートルに及ぶ巨大な翼は、
全てを引き裂く鋭利な爪を備えている。
右目に十字傷を持った隻眼のドラゴンは、
この近辺で猛威を振るう最強のドラゴンの特徴と一致している。
ドラゴンは利口だ。
騎士やスロウに悟られぬよう、遥か上空を飛び、
彼らの視界の外から一気に攻めたてる。
そうして反撃の余地を与えない。
騎士たちが視界に捉えた時にはすでに彼らの体をえぐる距離まで間合いを詰めている。
それほどの高速飛行をドラゴンは難なくおこなう。
ゆえに世界の制空権は常にドラゴンにある。

だが、
世界にはそうしたドラゴンたちと渡り合える者がいる。

スロウは背中に超高速で迫るドラゴンの頭、
右側面に鋭くまわし蹴りを繰り出す。
赤いコートが風に舞い、

スロウの黒いロングブーツがドラゴンのザラついた鱗にめり込んだ。
右目を潰されているドラゴンは、死角からの攻撃に反応が遅れ、勢いをそのままにその巨体を強引に大地に叩きつける。
木々がなぎ倒され、地面をえぐる轟音と共にドラゴンが呻く。
「またお前か……俺を誰かわかっていて襲ってきたのなら、残念だが利口とは言えないな……」

「グオォーーーー！」

ドラゴンが首をもたげ、空に向かって咆哮する。
その雄叫びが大地を震わせ、木々が一層ざわついた。
この星を統べる者の、王者の叫びにまるで星が呼応しているようだった。
それでもスロウは怯まない。
むしろ、「うるさくて敵わないな」といった具合に溜息をついた。
車両の荷台にいた騎士たちも自分たちの仕事を全うするために外に出てきたが、
その雄叫びに足がすくんでしまっている者がほとんどだ。
スロウは告げる。
長い黒髪をおさえる青いバンダナを整えながら、それはめんどくさそうに。
「どんなに威嚇したって俺には無駄だ。めんどうくせえことしてんじゃねえよ。『お前の右目を潰したのは誰だと思ってるんだ？』」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

『首都フリューゲル』を見渡すホルン城の一室。そこは騎士たち

の詰め所として利用され、今も多くの騎士が自分の武器を磨いたり、己の肉体を鍛えたりと各々で精を出している。
その中で資料に目を通す一人の男がいた。
彼は王国ホルンの騎士団長であり、『連合』でも五指に入る実力の持ち主である。雲のように白い巻髪が特徴的で、白いスーツをキッチリと着こなし両手には白い手袋をはめている。戦闘においては返り血を浴びず、純白のスーツを汚さないことをモットーとしていることから、

『白騎士』と呼ばれている。

白騎士が目を通しているのは騎士の行動表だ。
何処で、誰に、何人の騎士を同行させているかを細かに書き記したものである。
「スロウスとはあの男のことか？」
その声に別の書類を書いていた部下の男が机から顔を上げた。
「ええ。あの『怠惰の王』ですよ。いちおう『七人』の一人ではありますが、心配なので九名ほど同行させました。場所もあのバルブ炭鉱ですので」
「そうか……では、後で『協会』からクレームがくるかもしれないな」
白騎士は部下を残念そうに眺めてそう言った。いや、実際はクレームを受ける立場にある自分の身を嘆いたのかもしれない。協会のトップは見た目こそ麗しい美人だが、各機関の上層部の中では怒らすと手に負えないことで有名なのだ。
「クレームですか？　もっと騎士をつけた方が良かったでしょうか……確かにあそこのドラゴンは手強いですが、仮にも『七人』の一人に対してこれ以上の人数を割くのは失礼かと……」
それでも部下は何にクレームがつくのがわからないという風な面持ちで上司に尋ねる。

「その手強いドラゴンの右目を潰し『一年前』この国を救ったのは他でもないスロウだよ。スロウが騒がれるのがめんどくさいというだけの理由で、このことは公には発表されず、我々、騎士の手柄になっているがな。それが事実で真実さ」

「そんな……」

部下は大きく目を見開く。上司である白騎士の言葉が未だに信じられないといったふうに目をパチクリさせた。。

「ここに記された騎士たちの名前を見る限りじゃ……残念ながらスロウの足手まといにしかならないだろうな……しかし、あいつが仕事をするとは……今日は雪でも降るかもしれないな」

『ドラゴン』

二本脚でドッシリと構えたドラゴンの口からは灼熱の黒煙が立ち昇っている。
対するスロウは直立のまま、特に構えもせずドラゴンの様子をうかがう。
正面で互いに睨みあうが、膠着状態はそう長くは続かなかった。
口を大きく開き、その凶悪な牙を剥き出してスロウに突撃するドラゴン。
強靭な脚を用いた突撃は、その巨体からは想像できない程のスピードを叩きだす。
ドラゴンたちは空だけでなく大地も自由に闊歩する。
スロウはドラゴンの突撃を今度も死角である右に旋回してかわす。
ドラゴンは手ごたえが無いことを確認する間もなく、
無数の棘に覆われた尻尾を自身の右側に豪快に振るう。
「！」
視界に捉えられない場合は、
死角である右側に敵がいるということを学習したのだろう。
スロウは尻尾をモロに全身に受けると数十メートル吹っ飛ばされ、
木々を何本も貫通しようやく止まる。
「いってえ……」
胸や腹周りは尻尾を覆う棘の突きささる鋭い痛みと背中を勢い良く打ちつけられた事による鈍い痛みがまるで不協和音を奏でるように全身を蝕む。だが、それでもドラゴンは待ってはくれない。
再度、高速の突撃が迫ってくる。
両手を自分の腰にまわし、ベルトに納まった二本の短刀を手に取る。
一本は切っ先から柄にかけて黒で統一され、
もう一本は白で統一されている。

二本とも全体に金字の極め細やかな紋様が彫られていることから対であることが分かる。
五〇センチ程の刀身はスロウが持つことによって、
倍の長さに伸び、短刀からその姿を変貌させる。

『法具ベルフェゴール』
スロウの魔力に呼応し、その長さと強度を自在に変化させるモノクロの二本の短刀。

突撃をかわし、今度は尻尾の猛攻もしっかりと避け、
スロウは巨体の背後に回り込んで右足に苛烈な攻撃を加えていく。
「グガァーーーー！」
たまらず空へ脱出すると連続して火球をスロウに向けて放つ。
大地の悲鳴とともに無数のクレーターを作りだし、
建物の跡や古くなった資材が燃えると、辺りに異臭が立ち込める。
騎士たちはスロウに加勢しようと試みた。だが、すぐにスロウの言った通り自分たちが足手まといであることを理解する。頭で理解するというよりは、本能的にあの場に行くことを騎士たちの体が拒んでいた。口では加勢すると言っておきながら体が動かないのだ……。少し距離をとっているが、大地をつたう振動と衝撃波は騎士たちの所にまで及んでいる。
「これが……『セブンス』の実力……」
騎士たちは目の前の光景に息をのむ。
火球はスロウには当たらない。
だが、空を飛ぶドラゴンに対してスロウも決定打が無い。
スロウの息が切れる。
たった一撃。
尻尾のなぎ払いを受けただけだが、体の負担は計り知れない。
「ああ……めんどくせえ！」
スロウは炭鉱から少し距離をとると、全力で走りだす。

ブーツの金具がガチャガチャと音をたてるが、
それも一瞬のこと。
加速したスロウは赤褐色の山肌を強引に駆け上がる。
そして、ドラゴンとの位置関係を把握すると、山肌を勢いよく蹴りつける。
宙に投げ出されたスロウに対し、
ドラゴンは大きく口を開け、容赦なく襲いかかる。

繰り返すが、空はドラゴンの支配下である。
どんなことがあっても翼をもたない人間は空では無力だ。

「しゃらくせえっ！」
切っ先をドラゴンに向け、ベルフェゴールを正面で構える。
二本の刀は螺旋を描いて切っ先を伸ばし、ドラゴンを口から貫き串刺しにする。

はずだった……

ドラゴンはギリギリのところで軌道を変え、ベルフェゴールは赤褐色の左翼を貫いた。
「ギャーーーーー！」
激しい咆哮とともに空中で身動きの取れないスロウへ、
ドラゴンが渾身の火球を放つ。
「くそ……」

火球が直撃しスロウが消炭になったのを確認すると、ドラゴンは西の空へ消えていく。
なんとか致命傷を避けたドラゴンだが、
左翼に受けたダメージは重く、飛び方はどこかぎこちなかった。
「そんな……」

騎士たちは燃えた残骸をしばしの間、言葉なくみつめる。騎士として何もできず、守る側の立場にあるはずが、守られ、そして死なせてしまった……。そこにあるのは「無念」の一言。
「ああ……こんなに汚れちまった。やっぱり白いシャツは汚れが目立つな」
ガサゴソと騎士たちから少し離れた茂みで何かが動き、声がした。
そこには、『赤いコートを失った』スロウが体に付いた土や葉を払っているところだった。
その姿をみるや騎士たちがすぐさま駆け付け、車を降りた時に最初にスロウを呼びとめたかっぷくの良い騎士が声をかける。
「ご無事で何よりです……しかしどうやってあの攻撃を防いだんですか？」
ん？　と顔を上げたスロウは「ああ、そのことか」と簡単に言う。
「防いだっていうよりは、避けたのさ。あそこで消炭になったのは、俺のコートだよ。とっさに脱ぎ捨ててそれを振る反動で俺はこっちに落ちた。変わり身の術って感じかな」
「そ、そんな芸当をあの一瞬で？」
騎士たちは驚きが隠せない。確かに彼らの位置からでは火球が正面になり、スロウが隠れてしまって何をしていたかを見ることはできなかった。
だが、一瞬である。攻撃したドラゴンの眼さえごまかしたことになる。
よく見ると燃えた残骸は人が燃えたにしては、跡形もなくきれいに灰になりすぎていた。
「こういう時、二刀流は不便だと痛感するよ。急だったから『黒い方』を落とすしかなかったんだよな。探すのを手伝ってもらえるか？」
「それはもちろん構いません。ですが、その前に一つ……」
誰かが指示をするわけでもなくごく自然に騎士が全員、横一列に並ぶ。

「いったいどうしたんだ？」
突然のことにスロウはまるで理解が追い付かない。
「申し訳ありません……我々は騎士でありながら全く加勢することが出来ませんでした。我々は無力でした……」
騎士たち全員の表情にはドラゴンの脅威が去ったことに対する安堵と、ドラゴンに対して無力だった悲壮が入り混じっている。
「なんだ、そのことか。気にしないでくれ。むしろ力量をわきまえ、離れていてくれたことは評価に値するよ。俺だってボロボロだし偉そうなことは言えない」
九人の騎士はその言葉を受けると姿勢を正し、スロウに対して一礼した。話していたのは常にかっぷくのいい一人の騎士だったが、全員の心境は一致していた。
そこには、最初にスロウに対して抱いていたような実力に関する疑念は一切なかった。
「さてと……本題に入るか。『リュミエール聖石』ちゃんとあればいいが……」

『テレサ・アルバニア』

「世界には様々な職種がありますが、この『学園』では、
『騎士』・『法師』・『職人』・『商人』
の四つに関して優秀な人材を育成することを旨としています。では、クロワさん。一つずつ説明していただけますか？」
眼鏡をかけた銀髪の美しい教師が金髪の少女に声をかける。
「はい」
少女は凛とした声を教室に響き渡せると姿勢よく立ちあがった。

クロワ・エイヴリッヒ

端正な顔立ちと彼女が持つ独特の雰囲気が他者をというよりはクラスメイトをどこか寄せ付けない。綺麗に揃えられた短い髪は首元でカールしていて、年相応の愛らしさがある。
シンプルな教室には男女がほぼ同数着席しており、皆が学園指定の紺のブレザーに女子は水色のリボンに紺のスカート。男子は水色のネクタイに紺のズボンを着用している。
「まず、『騎士』は国を守る者。
空を支配する『ドラゴン』と時に戦い、他国との問題が起こった場合も先立って矢面に立つ者たちです。昨今は国同士の戦争も『一〇年前』を境に起こっていませんので、主にドラゴンからの国の防衛を仕事にする者たちです」
「はい。よくできました。では、法師と職人はどうですか？」
「『法師』は『器』を『法具』に変える者。
『職人』が洗練された『器』を作り、そこに『法師』が魔力を注ぐ。言うなれば、『職人』が作った体に『法師』が命を吹き込み『法具』を作るといった感じでしょうか。」
「では、『法具』とはなんですか？」

「『法具』とは我々人間が魔法を使うために必ず必要とする物です。
『法具』に私たちは『マナ』と呼ばれる生命力を注ぎ、魔力に変換します。『法具』にはすでに『法師』の魔力が注がれているので、それに応じた魔法が自然と発動するようになっています。『法師』が『法具』を作る時も専用の『法具』を用います。」
「よろしい。では最後に『商人』の説明をお願いします」
「『商人』は『騎士』から依頼を受け、
『職人』に元になる『器』の製作を依頼し、
完成した器へ『法師』に魔力を注いでもらい『法具』を完成させる者です。
『騎士』の優秀さは戦闘力であり、
『法師』は魔力。
『職人』は技術力ですが、
『商人』に求められるのは、人脈であり交渉力です。
優れた『法師』や『職人』との人脈を持つことで、依頼の品をより高度なレベルで完成させることが『商人』には求められます。また依頼は『騎士』だけでなく国やそこに住む人々からも幅広くよせられます。『法具』の種類は多く、その時々に応じた『法師』と『職人』を選ぶ判断力も求められます。こうした中で最も優秀といわれる商人が……」
そこでクロワが不自然に言葉を切った。美人教師は首をかしげ、
「クロワさん？　どうかしましたか？」
「いえ……すみません。最も優秀といわれる商人が『セブン・マーチャンズ』と呼ばれる七人の商人で、世界に三万人いるといわれる商人たちの頂点に立っています。彼ら七人の年間の仕事量は全体の約五割。たった七人で全体の半分をこなしていると考えればその凄さも納得出来ます。」
「大変よくできました。席に着いてください。
――さて、今クロワさんが言ってくれて四つの職業に関しては、それぞれ国際機関があります。

『騎士連合』・『法師結社』・『職人組合』・「商人協会」です。
これら四つの機関、通称『四大機関』は国境を超えた活動を行っており、四つの職種につく、ほとんどの人間がいずれかの機関に属しているのが通常です。そしてこの『学園』も『四大機関』の合同出資によって運営されています。私の専攻する魔法学を学ぶにあたっても、今後自分がどういう風になっていきたいのかは考えながら授業に臨んでくださいね」

【キーンコーンカーンコーン】

「あ、いけない！　チャイムが鳴っちゃった！　今日はこれでおしまいにします。それではみなさん、ごきげんよう」
授業後の一連の動作の後、眼鏡の美人教師は腰まで届く銀髪に清楚な色香を漂わせながら、教室を後にした。廊下をただ歩くだけで、その容姿で男子生徒の目線をほしいままにする彼女だが、教師にしては若すぎる二〇歳という年齢から生徒に近い目線で相談にのることができるとあって、女生徒からの人気も高い。

それが『テレサ・アルバニア』という魔法学の教師である。

「テレサ先生！」
後ろから先ほどの金髪少女クロワが声をかけてきてテレサは振り向いて立ち止った。
「どうしたんですか？　廊下は走ってはいけませんよ？」
クロワが追いつくとテレサが歩き出し、クロワが横をついて歩く。
「あ、すみません。実はスロウのことなんですけど……」
「スロウ君がどうかしたの？」
「今日、久しぶりに仕事の依頼をもらったんです。それなのにスロウのやつ仕事は明日からだとか言って全然動かないんだから！」
「ふふっ、スロウ君らしいじゃない」

テレサは思わずクスクスと笑ってしまい、手に持った教材で口元を隠した。その仕草に育ちの良さが自然とあらわれていた。
「先生！　笑い事じゃないんだから！　スロウには七人の内の一人だって自覚が全然足りないのよ！　仕事をしているのは残りの六人で、自分は寝てばっかり。『先代』は真面目な人だったみたいなのに、どうして弟子のスロウはあんなに怠け者なのかしら」
「まあまあ、そんなこと言わずに。あなたはスロウ君のパートナーなんだから。しっかりサポートしてあげてね」
「うう……私なんかより先生の方がよっぽどパートナーに向いている気がします。先生の方がスロウのことよく知ってるし、スロウも先生のことは認めているみたいだし」
テレサはクロワの言葉に少し悲しい顔を見せた。だが、クロワは自分の置かれた状況について話すばかりでテレサの表情の変化に気づけないでいた。
「私じゃ駄目なのよ……私じゃ……ね――クロワだって学年三位の実力者でしょ？　自信を持ちなさい」
そう言うとニコッと笑顔を見せてテレサは職員室に入って行った。クロワは納得のいかない様子のしかめっ面で、テレサによって閉じられた職員室の扉をにらみつける。
「先生が学生の時はずっと一位だったくせに……」

『テレサ・アルバニア』（後書き）

今回は説明が長くなってしまって申し訳ありません。

『トート・サヴォワール』

翌朝。　再びのスロウス邸。

「さ、今日は仕事するわよ！」

「ちっ！　めんどくせえ。しょうがねえな、ついてこい。これから『ホーム』に行くぞ」

スロウは二本の短刀を交差させて納めたベルトを腰に巻くと短めの赤いコート（新品）を白いシャツの上から羽織った。下は黒の革ズボンにロングブーツで、脚の長さが強調されている。頭部は長い黒髪が邪魔にならないように青いバンダナでまとめられていた。

『ホーム』とは商人協会が、ある程度の規模の街におく集会所である。

そこには掲示板に依頼書が掲載されており、商人たちはそこから仕事を選ぶ。

ホームには職人や法師もやってきて、自分たちを商人たちに売り込むためにあちこちで酒が酌み交わされ、商談が行われる。

無論、優秀な人間はここで仕事を探す必要はない。自らを指名して依頼してくれるほど名が売れれば、ホームを活用する必要もなくなる。ただ、名が売れるまではホームで下積みをするのが、職人も法師も商人も一般の常識である。

ここ王国ホルンの『首都フリューゲル』のホームでも行われていることは他と何ら変わらない。

一階のフロアには木製の長机や丸太椅子などが置かれ、大衆酒場の様相を呈しており、現在も騒々しく人々が行き交い、商談や話し合いが行われている。中には全く関係のない者が混じって飲んでいる席もある。天井は二階まで吹き抜けの構造になっていた。

酒場を見下ろす形で周囲を囲う二階部分には、依頼書を張り付けた掲示板が並び、それぞれ難易度別にE～Aランクで分けて掲示されている。
最上階である三階部分は個別に部屋が設けられており、いくらか金額を支払うことによって、外では出来ない重要な商談に用いられたりする。

「なんだかんだで私、ホームは初めてかも」
「そうか。ならよそ見して、はぐれんじゃねえぞ。ここはお前みたいなカッコのやつが来る場所じゃねえからな」
スロウの言葉にクロワは自分の服装を確認する。
いつも通りの学園指定の紺のブレザーだ。
「この格好のどこに問題があるっていうのよ！」
自分の気に入っている服装を馬鹿にされたと思い、クロワは憤慨し喧嘩腰の口調になる。
まあ、喧嘩腰なのはいつものことではあるが。
「服装っていうよりはお前みたいなガキが来るところじゃねえって意味だ」
「あんたこそ成人したばっかじゃない！　三年早く生まれたくらいで偉そうにしないでよね！」
「はあ……ほんとにめんどくせえな……」
ため息まじりに二人は一階のフロアを横切り、奥の階段を登る。
大人が一〇人はすれ違えそうな階段である。
すると、階段の中腹でビールを片手に壁に背を預けている男が、前を歩くスロウの横からクロワの視界に入ってくる。と、男と目が合った。
「やあ、美しいお嬢さん。綺麗な金髪だね。その髪型ボブっていうんだっけ？　中々良いじゃないか。オレは髪の短い子は好みだよ♪」
髪の長さはクロワと同じくらい。男としては長めの茶髪を緩やかにウェーブさせていて、見るからに女好きといった感じの男だった。

こういう軽そうな男に限って本当に軽くて女はひどい目にあう事をクラスメイトの少女たちが話しているのを小耳にはさんでいて、クロワも知っている。あえて引っ掛かる気にもクロワはならない。
「あなた誰？　気安く話しかけないでもらえるかしら。私の連れはおっかないわよ？」
クロワは嘲笑混じりに軽くあしらうと前を歩くスロウの後を追う。
正直、クロワはその容姿からナンパというものは結構される方だ。最初の頃は戸惑ったりもしたが、今ではあしらうのも慣れた。最近は彼女の放つ雰囲気に近寄る男も減った。
「いやいや、こりゃまいったね。さすがに『セブンス』に出てこられちゃ、オレも敵わないな」
男はヘラヘラと答えただけだが、そこでクロワの足が止まる。
「今、なんて言ったの？」
振り向き様にクロワが疑問を投げかけ、男はクロワの目を見てそれに答える。
「セブンスのことかい？　さあ、どうして知っているんだと思う？
クロワちゃん？」
「あんた……一体何者？」
クロワは男に名乗った覚えもないし、スロウのパートナーということも言っていない。
仮に前を歩くスロウに気付いたとしても、名前はどこで知ったのか……
一階の酒場は依然として騒々しいが、二人の間の空気は急激に張り詰めていく。
「オレはトート。『トート・サヴォワール』。ただの女好きの情報屋だよ」
「私に何か用……？」
「いやあ、用って程でもないんだけどさ。『ランプ職人』を探しているんだろ？　良い奴を紹介するけど、どうかな？」
「ランプ職人？」

クロワの疑問を無視してトートが彼女との距離をつめる。
二人の間の空気が凍りつく。
クロワは意識があっても動くことが出来ない。金縛りのような感覚。
「知りたいかい？」
クロワとトートの顔がおよそ一〇センチに満たない距離まで密着すると、
次の瞬間、
場内全体が『殺気』で満たされる。
トートは一瞬で階段の一番下に移動していた。
クロワの前には赤いコート。
スロウが立っていた。
場内はどこからかの殺気に静まり返ったが、酒の勢いもあってか、気の所為だったと元の騒がしさを徐々に取り戻していく。
「あんまりウチのにちょっかいを出さないでくれるか？」
「ちょっかいだなんてそんな。オレはあんたたちに有益な情報を持っているからそれを売ろうとしただけなんだけどね」
スロウの言葉に対してトートの態度は依然として変わらない軽いものだ。
「どのみち、こいつには情報を買う買わないの決定権がない。そういうことなら最初から俺に言ってもらえると助かるな。実際、あんたの情報は高そうだ」
「そんなことないさ。オレは美少女と美女には安くするって決めているんでね」
「とにかく、あんたがどこの誰かは知らないが、見ず知らずの誰かから情報を買うようなことを俺はしない。めんどうくさいからな」

「さいですか……そりゃ残念！」
トートは軽く肩を落とし、残念そうに見せると、ビールを飲みながら酒場に消えていく。
その横顔には微塵も後悔の色が無かった。
まるで断られるのが当たり前。
こうなることがわかっていたかのような表情だった。

「おい！　いつまで呆けているつもりだ？」
「……え？」
「ったく、まんまとあの情報屋の術中にはまりやがって……」
「術中？」
我に返ったクロワはいつもの喧嘩口調を忘れて素直に聞き返した。
「おそらくだが、あの男はああやって他人の心に入り込み、情報を聞きだすんだろう。一種の洗脳みたいなものだ。魔法でない分、余計に性質が悪い。今度会ったらあいつの目は見ないことだな」
「洗脳……」
クロワの全身を急激な悪寒が襲い、ブルブルと体が震えだした。
抑えようと思っても止まらない……
一種の恐怖を植えつけられたような感覚。

バシンッ！

唐突にスロウの平手打ちがクロワの背中を襲う。
「いったーい！　何すんのよ！　そんな馬鹿力で叩かれたら死んじゃうじゃない！」
「ピンピンしてんじゃねえか。ほら、油売ってないでさっさと行くぞ」
「ほんっと信じらんない！　あー、まだ背中が痛い。これがほんとのドメスティックバイオレンスね。あ、でも家庭内とは違うわね。パワハラ……そう！　これはパワハラよ！　パワーハラスメント！

いつか絶対に訴えてやるんだから！」

背中をさすりながら、まくし立てるクロワの体からは、

自然と悪寒が消え、トートに抱いたはずの恐怖も忘れ去られていた。

『ゴルドラ・ブリュンガルド』

スロウとクロワは二階を素通りし、そのまま三階へ上がる。
階段を登りきると白塗りの扉があり、そこからは建物の造りが今までの木造から変わる。
扉の先は白い壁紙の栄える小さな小部屋だった。部屋は二階までの騒々しさとは無縁で、どうやら防音設備がしっかりとしているらしい。右側にはカウンターテーブルがあり、その奥に座る若い受付の女が扉を開いた二人を一度確認すると、すぐに手元の本に視線を戻す。カウンターの正面、スロウ達から見て左側には三階の入口と同じ型の扉がある。
「一五号室を予約しているスロウスだ」
カウンターの前まで行くとスロウが言う。
女は本から顔を上げ、スロウの顔をまじまじと見つめると、またすぐに本を読み始める。
「ゴルドラならもう中だよ。時間は今から最大で一時間。延長は認められないから」
「問題ない。三〇分もかからないさ」
女の言葉に一言返すと、受付正面の扉を開く。
そこには左右に番号の振られた扉があり、右は偶数。左は奇数で手前から若い番号順になっている。一五号室は左側の奥から三つ目の扉だ。
初めての場所でクロワは何もわからないまま、スロウの横をついて行くしかない。
「さっきの人、愛想が無さ過ぎるんじゃない？　受付なんだからもう少し愛想が良くても良い気がするけど」
「あいつに求められているのはそこじゃない。あの女は一度見た人間の顔を決して忘れない。それは顔のホクロの位置からしわの数まで全てを記憶しているらしい。前に完璧な変装を施したスパイが来

たらしいが、まつ毛の本数が違うとかで見分けたそうだ」
「ま、まつ毛の数？」
「実際は来る前にまつ毛が抜けたらどうするんだってとこだが、そのスパイはそれに動揺してボロをだしたらしい。魔法による変装が不可能な今は、愛想なんか度外視しても需要があるのさ。もっとも、完全に覚えられるのは顔だけらしいがな」
　この世にある魔法は全部で六種類。
　白・黒・赤・青・黄・緑の六色で区別されるが、その中に変装に用いるような形態変化の魔法は存在しない。つまり物の形を変えるということは魔法では不可能とされている。

　『１５』と書かれた扉を開けると机の向かい側にスロウの二倍はありそうな大男が大股でドカッと座っている。椅子の大きさが大男にあっておらず、大男が椅子から落ちるのが先か、椅子が壊れるのが先か、というような印象を与える。
（椅子が可哀想……）それがクロワの部屋に入って最初の感想だった。
「がっはっはっは！　遅えじゃねえか！　噂通りの怠け者ってか？」
「ちょっと下でな。それよ――」
「お！　クロワちゃん久し振りだな。元気だったか？」
　間髪いれずに大男は喋り続ける。スロウが遅れたことなど実際はどうでもよかったようだ。
「あ、はい。ゴルドラさんも御元気そうでなによりです」
「がっはっはっは！　俺様はいつだって元気さ！」
「本題に入っても構わないか？」
スロウは話が長引く前に割って入る。クロワも察してスロウの後ろに下がった。
「おっと！　そうだった！　今日は『ランプ職人』のことだったな」
「え？」クロワは大男の言葉に敏感に反応した。

「たしか依頼の品は『聖なる灰』だったな。この近辺で作れそうな職人と言ったらランバダが有名だが、俺様としてはお薦めしないな」
「なぜだ？」
「確かにランバダはいい仕事をするが、気難しい。最近じゃ、高齢のせいもあって質も落ちているって噂だ。それでも周囲にたいしたランプ職人がいないことや有名なこともあって仕事は結構抱えているから、今から依頼しても一年待ちは覚悟しなきゃならねえ」
「だが、『聖なる灰』はＳランク法具だ。その器を作れる職人じゃなきゃ暇人でも意味がない」

『聖なる灰』とはランプ型の法具である。形状はランタンを模しており、
その効力はランプの光の届く範囲に防御結界を張るという法具である。
今回の依頼はホルンの南西の町『コルネット』の町長からのもので、ドラゴンの脅威から町を守るために新しい結界用の法具が必要ということだった。
法具と言っても全てが武具というわけではない。
町の照明から料理器具・通信機器など生活のいたるところに法具は普及している。そういった背景から生活必需品に特化して法具を大量生産する企業も存在し、そうして世界の貴族と並ぶ巨万の富を得た男が『セブン・マーチャンズ』にも一人いる。

法具のランクは、法具作成の難易度、つまり素材の入手難度・必要とされる法師と職人の力量を総合的に評価したものである。最も困難なＳＳから最も手軽な電球レベルをＥランクとして順位付けがされる。
「ところがどっこい！　実はこのフリューゲルに良い職人がいるんだよ」

「この街に？」
「ああ、三番街の『ベルスーズ』って小さな店だ。地図はここに書いておいた」
ゴルドラはくしゃくしゃの紙を机に広げ、スロウはそれを手に取ると赤いコートにしまう。
「元々、腕の良い職人がいたんだが、急死しちまってな。今は息子のオレオルってのが二代目として細々とやっているらしい。ここでたまに聞く噂じゃ『暖かいランプ』なんてのを作るらしいぜ」
「暖かい、ね……」
「まあ、どのみち、一年待つつもりなら会うだけあってみれば良い。判断すんのはあんただ」
「わかった。金はいつもの手筈になっている」
「まいど！」
ゴルドラは毛むくじゃらの厳つい顔に一層の笑顔をつくると、スロウとクロワに手を振って見送った。

ゴルドラ・ブリュンガルド

スロウの師匠にあたる先代が懇意にしていた情報屋。先代とは親友で、先代が死んでからもスロウに良く力を貸してくれる大男。よくホームの酒場を利用し、そこで話される会話に聞き耳を立てて情報を収集している。

「ねえ、ランプ職人の話って誰かにしたの？」
「なぜ、そんなことが気になる？」
先刻通った廊下を戻る道すがら、クロワが尋ねる。
ここなら防音性にも優れていると判断してのことだ。
「さっきのトートって男がランプ職人のことを知っていたのよ……」
「……」スロウが立ち止まる。それはあまりにも唐突だった。
「どうしたのよ……」クロワはスロウの顔を覗き込む。

「聖なる灰の依頼は協会を通した正式なものだ。俺が関わっていることは、どこかから漏れる可能性は充分にありえる。――ただ……」
「ただ？」
クロワは息をのむ。
そうさせる空気をスロウが作り出しているからだ。
「人脈とそれに関する情報は商人にとっての生命線だ。俺にランプ職人のつてがないことを知っているというのは問題だ。あの男が何者かわからない以上、充分に注意するべきだな」
「……なんだかめんどくさそうなことになりそうね」
クロワが思わず肩を落とすと、スロウは拍子抜けしたように言う。
「お前がそれを言うのかよ……」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「キー君、キー君！　言われた通り『彼ら』に会ってきたよ」
「反応はどうだった？」
「つまらないくらいキー君の予想通りだったよ。けど、面白そうなコンビではあったかな」
「面白いのかつまらないのかどっちなんだよ……」
「キー君の想像の範疇なのはつまらないけど、人物的には魅力的だったってことさ。世間が『怠惰の王』と蔑む理由がわからなくなるほどね」
「へえ、そんなに魅力的なのかい？　まあ僕ほどじゃないだろうけど」
「キー君のことはどうでもいいよ」
「……」
「それにしてもすごかったな。彼の殺気を直接向けられてごらん？　ゾクゾクするから♪」

「それより、僕のことをキー君と呼ぶのはやめてくれないか？」

『オレオル・ジーン』

首都フリューゲルの三番街と四番街。
整備の行き届いた石畳の道路と、その両脇には統一されたレンガ造りの建造物がずらりと並び、景観に優れている。特に四番街は観光客も多く、建造物のほとんどが商業目的に使われている。三番街はそれに反して静かな居住区画になっているが、その中にひっそりと、
だが、一際明るい小さな店があった。
『ｂｅｒｃｅｕｓｅ』と書かれた深緑の看板の下、
一人の青年は今日もコツコツとランプを作っていた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ここだな……」
「ショーウィンドウにランプがこれだけ並んでいるんだから間違いないわね」
ホームを出た二人は簡単に昼食を済ませると、その足でゴルドラに聞いた『ベルスーズ』という店を探した。店は緩やかな坂道の一番下にあり、深緑の看板を掲げていた。周囲には他に店らしきものが無かったので、すぐに見つけることが出来た。
ショーウィンドウにはいくつものランプが展示されている。行儀よく並んだランプにはそれぞれに個性があり、一つとして同じものはなかった。ランプの下には値札がついているが、クロワにはランプの相場がわからないので、高いか安いかの判断がつかない。
スロウはショーウィンドウを眺めると、店の周りの建物の玄関先を見て回る。

店の外からは中の作業場を覗くことができ、そこにはクロワと歳の変わらなさそうな青年が黙々とランプの製作に精を出していた。
クロワが率先して店に入ると扉に付いた小さな鐘がカランカランと音を立てて、青年に客が来たことを知らせる。
「はっ、はーい！」
奥の作業場から元気な声が発せられると、すぐに青年が店に出てくる。青年の手は煤汚れたタオルを持っていて、両手の汗を拭うために忙しなく動いていた。正面から青年を見ると頬のそばかすが印象的で職人と言ってもまだあどけなさが残っている。茶色い癖毛も青年を一層幼く見せているようだった。
「きょきょきょ今日はどんなランプをおおおお探しですか？　ううウチは小さい店ですが、ラララランプの数はたくさんありますのでゆゆゆゆっくり見ていってくくく下さい。」
青年は強引に愛想笑いを作って二人に接客をするが、慣れていないのが誰の目から見てもわかるような挙動不審さがあった。
「あの、今日はランプを買いに来たんじゃないんです」
「へ？」
青年は「じゃあ何しに来たんですか？」といわんばかりの表情を見せるので、クロワはすぐに本題に入ることにした。
「あなたは『オレオル・ジーン』さんで間違いありませんよね？」
「え、ええ、そうですけど……」
「実は、今日はあなたに器の製作を依頼しに来たんです」
「器？　まさか法具の？」
「それ以外になにがあるんだ？」
「スロウは話がややこしくなるから黙ってて！」
「器ですか……僕に出来るでしょうか……」
「これまでに法具製作の経験は？」
スロウはクロワを無視して黙ることなくオレオルと会話を進める。その状況にクロワは眉間にしわを寄せ、小さく頬を膨らませた、
「……ありません」オレオルは申し訳なさそうに俯く。

「仕方ない、他をあたるか……」
スロウが踵を返して店を出ようとするのを、クロワがコートをひっぱって止める。
「待って！　私はオレオルさんに作ってもらうべきだと思う！」
「……なぜだ？」
「それは……」
スロウは真っすぐにクロワの目を見つめる。クロワも視線を逸らさない。逸らしたら負けだという訳のわからない意地もあるが、彼女の中でオレオルに作ってもらうという意思が揺るがないからでもある。ただ、その理由を聞かれてしまうと押し黙ってしまう。
「あの……ちなみに法具っていうのは、なんという法具ですか？」
二人の沈黙にオレオルが割って入り、スロウは視線をクロワから外して言葉少なに答える。
「聖なる灰だ。知っているか？」
「せせせ聖なる灰ですか？　そりゃ知っています。ランプ職人が携わる物の中で最もランクの高い法具ですから」
「やってみる自信は？」
「……製作の過程はわかっています。材料があればなんとか……」
その言葉を聞くとスロウは赤いコートのポケットから手の平に納まる大きさの石を取り出した。石は蛍の光のように自ら淡い光を放ち神秘的な輝きをしている。
「これって……もしかして『リュミエール聖石』ですか？」
「そうだ。聖なる灰の製作に必要不可欠な聖石。逆にこれを使う以外は、さほど珍しい材料はいらないはずだが。他に必要なモノはあるか？」
「いえ、リュミエール聖石以外は作業場にあるもので大丈夫です。――あの……手にとって見ていいですか？」スロウはオレオルの手に聖石を渡す。

「すごい！　本物がこんなに美しい石だなんて！　一体どこで手に入れたんですか？」
「バルブ炭鉱だ。この辺りじゃあそこでしか手に入らない」
「バルブ炭鉱！　ドラゴンの巣じゃないですか！」
「リュミエール聖石はドラゴンの体表から放たれる特殊な気泡をある種の環境下で浴び続けた石が変化したものだ。その性質上、リュミエール聖石はドラゴンの巣で発見されることが最も多い。聖なる灰のランクがSと高いのも、聖石の入手困難さを考慮されてのことだ」
「あなたは……一体何者なんですか？」
「俺はスロウ。商人をやっている。協会の依頼で聖なる灰を作ることになった。ここは情報屋に聞いて知った。だが、今大事なのは、お前が出来るのか出来ないのかということだ。出来ないなら他をあたる。どうなんだ？」
スロウの言葉にしばし沈黙したのち、
「……やります！　作ります。僕に作らせて下さい！」
オレオルはスロウを正面から見据えて言いきった。スロウも目線を逸らさない。そこには先ほどまでのオドオドとした頼りなさは感じられなかった。慣れない接客の商売人から誇り高い職人のそれにオレオルの顔は変化していた。
「良い返事だ。おいクロワ、あとはお前に任せる。器が出来たら知らせろ」
「なっ、ちょっとそれどういうことよ！」
「ここからは俺の仕事じゃない。オレオルの仕事だ。お前はそれをきっちり監督しとけ。聖石が無くなったら俺のところに来い。以上だ」
「ちょっと！」
今度はクロワの制止も虚しくスロウは店を出て行ってしまった。
「ほんとになんなのよ、あいつ……」
「あの……」

憤るクロワにオレオルが恐る恐る声をかける。
「なに？」
扉から視線をオレオルに戻すと、もとのオドオドした状態に戻っていた。
「さっきはどうして……ぼぼぼ僕に作ってもらうべきだって……」
「うーん……、横顔かな」
「横顔？」
「そっ！　さっき外から作業しているあなたの横顔が見えたの。そのときに『あ、この人は良い物を作りそう』って思ったのよ。お店に並ぶランプも素敵だったし。私ってね、そういう努力している、一生懸命な人の横顔に弱いの」
クロワはとびっきりの笑顔でオレオルに言う。いつもはツンケンしているが、その笑顔は天使の微笑みといっても良いかもしれない。美しい金色の髪や白い肌が紺のブレザーに良く映えた。普段からもっとこの笑顔をしていたら、クロワの人気は学園でもトップクラスだったかもしれない。
そんな最上級の笑顔を見せられ、毎日ランプしか見ていない職人のオレオルが何も思わないはずがなかった。そばかすの顔が真っ赤に染まる。

オレオル・ジーン、一五歳。

この日、彼は初恋をした。

『ランバダ』

「ワシに話とはなんじゃ？　製作の依頼じゃないというからわざわざ時間を作ってやったんじゃ。さっさと要件を言え」
「グランツ・ジーンという男を知っているな？」
ランバダというランプ職人のカップを持つ手が止まる。やがて静かにテーブルに置くと目を閉じた。カップからは紅茶の白い湯気が立ち上っている。
「グランツ……懐かしい響きじゃ……あいつは良い職人だった。生きておれば、ワシももう少し楽が出来たというのに……あの若さで死ぬとは……惜しい男を亡くしたよ」
「あんたはグランツが作った物とそうでない物の違いがわかるか？」
「当たり前じゃ！　ワシを誰だと思っておる」
スロウは布袋からランタンを一つ取り出してテーブルに置く。
「あんたはこれをどう思う？」
「……手にとっても良いか？」
スロウが頷くとランバダはランタンを手にとり、あらゆる角度から品定めする。
「点けても構わんかね？」
「ああ、だがそれは借りもんだ。丁寧に扱ってくれ」
「わかっておるわ」
言うと、原子的にマッチを木箱に擦りつけて火をつける。
法具があらゆる面で普及した時代であっても、原始的な方法をとることは少なくない。
それをランタンの上部を開けて放り込む。
明るい部屋の中が一層明るくなると、その光を眺めてランバダがおもむろに口を開く。
「ふむ、これはグランツの物ではない。だが、非常に良く似ている。特にこの光。ワシのランプにはないモノがある」

「暖かさってやつか？」
「そういう風に答える者もいるかもしれん……じゃが、実際のところワシには良くわからん」
「そうか、じゃあ、あんたやグランツの作った物に劣っているとしたらどんな点だ？」
「造形に関してはまだまだ修練が必要じゃ、しかし、そこまで大差はない。それだけの個性がこのランプにはある」
「わかった。聞きたいことはそれだけだ。時間を割いて悪かったな。」
明かりを消し、ランタンを布袋にしまって席を立つとランバダが引きとめる。
「なあ、教えてくれ。それは誰の作った物だ？　まさか、知らないということもあるまい」
スロウは扉の前で立ち止まると、
「オレオル・ジーン。グランツの息子が作った物だ。店の玄関先についていたのを拝借してきたから返しに行かなきゃならないがな」
「オレオル……あのちびっ子がここまでの物を作ったのか！」
「どうした？　顔がニヤついてるぞ？」
「ふっ、なに、なくした親友が帰ってきたように思っただけじゃ」
「親友と呼ぶには歳が離れ過ぎていると思うがな」
「はっはっは、まったくじゃ！　じゃがのう、スロウとやら、友情に歳は関係ない。それを言ってしまえば、ワシとグランツにも無理な話じゃ」
「あんたらはライバルだろ？」
「同じじゃ。ライバルであり親友じゃった。少なくともワシはそう思っとるがな……」
「そうか、爺さんも仕事がんばれよ」
「お前さんもな。良い話が聞けた。ありがとよ」
スロウが部屋を後にすると、ランバダは紅茶を口に含む。
「グランツのやつ、ただでは死ななかったようじゃな。ワシももっ

と頑張らなければならん。ガキに遅れをとっていたら、あの世でグランツに笑われてしまうわい」
椅子からゆっくり立ち上がると、隣の作業場へ足を向けた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ランバダの店を出ると白いスーツの男がスロウを待っていた。
「よう、『白いの』久し振りだな」
「『白いの』とはぞんざいだな……私にだって名前くらいあるんだが……」
「だって、あんたの名前長いだろ、覚えるのも口にするのもめんどくせえ」
「ふ、めんどくさいか、あいかわらずだな」
「俺に何か用なのか？」
「いや、昨日はウチの騎士が迷惑をかけたようだからな」
「ああ、そのことか。そこまで迷惑でもなかったけどな」
「そうか、ならいいんだ。ホルンの騎士団は他国と比べて圧倒的に実戦経験が少ない。特にドラゴンとの経験値は私がいうのもあれだが酷過ぎる。対人戦闘なら訓練のしようもあるが、ドラゴンに対しての訓練は大したことが出来ない。あれの相手をするとなるとやはり実戦での場数が必要になってくる」
「場数を踏む前に死んじまうけどな……」
「そういった面でも感謝している。私の部下に貴重な体験をさせ、全員を無傷で返してくれるとはさすがとしか言いようがない」
「まあ、俺はボロボロだったけどな。って、まさか……それを言うためだけに城から出てきたのか？　どんだけ暇なんだよ」
「たまには外も見てみたくてな。何事もなければ騎士など暇を持て余すばかりだよ。それに城下の平和を見守るのも我々騎士の務めだ

からな」
「暇か……職の選択を誤ったかな……」
スロウは顎に手を添えて考える。出来る限りめんどうじゃない、楽な方へ行きたいとスロウは常に思案している。
「お前ならいつでも歓迎するよ。王へは私から推薦状もだそう」
「おいおい、本気にしないでくれ。冗談だよ」
真剣な白騎士の眼差しにめんどくさそうな雰囲気を感じとり、すぐに否定した。
「そうか……残念だ」
心底残念がる白騎士を見かねて、半ば呆れたようにスロウは、
「……あんたは俺を過大評価しているよ」とため息混じりに告げた。
「そうでもないさ。じゃ、気が向いたら連絡してくれ」
そう言うと白騎士は城の方へと歩いて行く。

『ベルスーズ』

さっそく作業に取り掛かると言いだしたオレオルの後ろでクロワは作業の光景を眺めていた。

作業場の棚には作りかけのランプが並べられ、作業台として使われるいくつもの机の上には様々な工具が転がっていた。はっきり言って散らかっている。だが、オレオルはどこに何があるかちゃんと把握しているという。逆に整頓しすぎると、場所が分からなくなるらしい。

（こうなるなら参考書でも持ってくるんだったわ。次回からはそうしよう）

さすがに作業を長時間眺めていても退屈なクロワは次回からの暇つぶしを何にしようか考えていた。その暇つぶしの中身が勉強で、悩む理由がどの科目にするか、というものなのだからおそらく一般の学生には到底理解できない悩みかもしれない。

「あ、すみません、さすがに暇ですよね。どうしましょうか、何かお話でもしますか？　と言っても、ランプのこと以外は僕からお話しできることなんてないんですけど……」

オレオルが苦笑する。茶の癖毛を掻きながらもう一度すいませんと付け加えた。

「私は大丈夫。オレオルさんは作業に集中してください」

「あ、それなら心配しないでください。小さいころからランプ作りを遊びの変わりにやっていたので、この辺の基本的な作業は喋っていても勝手に手が動いてくれますから」

実際、オレオルの手はこうして会話している間もせわしなく作業を続けていた。それを後ろから確認したクロワは「じゃあ……」といって話題を考える。

「お店の名前。『ベルスーズ』って何か由来があるの？」

「ああ、由来ですか」とオレオルは作業をしながら答える。

今は机に図面を敷き、そこに全体図のデザインをしていた。
「ベルスーズって言うのは古い言葉で『子守唄』という意味だそうです」
「子守唄？」
その名前の意図がよめないクロワの言葉尻には自然と疑問符がついた。
「はい。父さん曰く、『街が寝静まるまでの間、ウチのランプで照らしていたいから』だそうです。母親の子守唄ってどこか暖かさを感じるでしょ？　そういうモノを目指したいって言っていました。だからベルスーズで子守唄なんだそうです」
「へぇー、なんだか、とっても素敵な話……」
「聖なる灰もこの話に通じるとこがあるんです」
「え？　どういうこと？」
「昔、父さんが聖なる灰の器を作っていたときに言ったんです。『聖なる灰はその光で、包み込む暖かさで町を脅威から守る。それは、父さんが作りたいランプの理想であり夢なんだ』って。子守唄には夜の闇から町を守るって意味も込めてあるんだとそのときに聞きました……だから」
そこで言葉を切るとオレオルの作業の手が止まった。
「だから？」
クロワは心配そうに言葉の続きを迫る。単純にその先が気になったことと、聞かなければ、オレオルは俯いた顔を上げないと思ったからだ。
「だから、今回この話を受けたとき、挑戦しようって決めたんです。聖なる灰を作ることで少しでも父さんに近づけるんじゃないかって、そう思ったんです。挑戦なんて理由で仕事を受けたら、父さんは激怒すると思いますけど」
「そんなことない……お父様はきっと怒ってなんていないと思う。あなたが町を守りたいって想いを器に込められたなら、きっと天国でオレオルさんのことを笑顔で誉めてくれるはずよ」

「ははははっ、そうでしょうか……」
オレオルは照れくさそうにそばかすの頬を人差し指でかくと、ふと時計に目をやった。
時刻は七時を示している。辺りはすっかり暗くなっていた。
「いけない、もうこんな時間か。クロワさんも今日はもう大丈夫です。作業にはあと三日間はかかりますから、それまでの間いらっしゃっても、そうでなくてもお好きになさってください。ちゃんとさぼらずにやりますから」
「三日ね。わかったわ。ちゃんと来るよ？　それが仕事だもの」
「わかりました。お待ちしています」
オレオルの表情が露骨に明るくなるが、クロワはそれが自分に向けられた好意の笑顔だとは夢にも思っていない。
「それじゃあ、また明日」とオレオル。
「また明日」クロワ。
店の玄関先で挨拶を交わすとクロワが見えなくなるまでオレオルは見送った。
振り返り店の玄関先を見てオレオルはあることに気がつく。
「あれ？　ランプどこやったっけ……？」

『トール・イーリス』

翌日の放課後。
クロワは教室で黙々と机に向かっている。
彼女たちが通う『学園』の正式名称は『四大機関所属人材育成学園』である。そのネーミングセンスのなさから、学園内外を問わず『学園』の愛称で呼ばれている。
三年制のカリキュラムは、一年目は全生徒共通の授業。そして年五回の定期考査の結果で二年生進級時にクラス分けがされ、実力に応じた授業がなされる。クラスはアルファベットのＡからＪの全一〇クラス。一クラス四〇名の計四〇〇人で構成される。三年生になると各々が目指す四つの職種から専門の授業を選択していくことになる。
学年第三位のクロワがいるのは『２―Ａ』。
二年生で最も優秀な生徒の集まるクラスである。
そういうクラスだと、放課後の教室の光景も他のクラスとは異なってくる。クラスの大半四〇人中三〇人弱がクロワと同様に勉強に勤しんでいる。
「なあなあ、ここってどういう意味だっけ？　クロワって魔法学得意だったよな、教えてくれよ」
そう声をかけているのは、逆立った金髪が鮮やかな一人の青年だった。こう見えて学年主席であり、『運営』と呼ばれる生徒自治の代表も務める男である。気さくで人望もあるが、中々に変人であることでも有名だ。まず、普通の青年はクロワに話しかけない。
「あんたに教えることなんかないわよ。私が得意な魔法学だってテストであんたに勝ったことなんか一度もないんだから」クロワは顔もあげずに言葉だけ返す。
「そうだっけ？」
クロワはこの男が嫌いだ。

というよりは、クロワは『天才』と呼ばれる人種を好きになれない。
大した努力もせずになんとなく学年一位です。みたいなこの男は、学園内で一番苦手とするタイプだ。逆に魔法学教師の『テレサ・アルバニア』のように努力で学年一位をとり続けたような人間を心の底から尊敬する。
ただ、努力をひけらかすような人間は好きじゃないし、かといってこの男が陰で血の滲むような努力をしていたとしても、それが見えなければ尊敬しようがない。
クロワという少女も割とめんどくさい人間である。
「なあ、頼むよ。同じ金髪のよしみでさ！」
「金髪なら他にもいるじゃない。それと金髪が理由で私に声をかけたなら、あんたは明日から髪の色を変えてきなさいよ。それで全部うまくいくから。あ、銀髪もだめよ」
そうすれば、この男と話すこともなくなる。クロワは安易にそう考えた。銀髪も拒んだのは、尊敬する　テレサと髪色が同じになってしまうからだ。
「金髪でも銀髪でもなければ、少しは仲良くしてくれるのかい？」
青年はニコニコしながら尋ねる。
「そうね、あんたが誰とも違う髪色にしてきたらその時は考えてあげる」
クロワがどうしてこの青年にここまで偉そうに接することが出来るのか周囲は甚だ疑問に感じているが、クロワは自然と青年に対してさらに注文を付け加えていた。
「オッケー、じゃあ、今日は帰るとするよ」
青年はそそくさと自分の席にある鞄を掴んで教室を出ていく。

翌朝。
クロワが廊下を歩いていると、自分のクラスの前に人だかりがで

きていた。
見知らぬ顔も多い。他クラスの生徒だけではない。ネクタイやリボンの色で判断できるが、他学年の生徒までが、教室の前方と後方で人の山を築くのに加わっていた。
「ちょっとどいてー」
強引に人の海を泳ぎきるとそこに待っていたのは、
色鮮やかな『虹』だった。
「やあ！　クロワ！　どうだいこの髪！　斬新だろ？」
「……」
クロワは言葉をなくした。
それこそ一生喋れなくなってしまうんじゃなかというほどに、言葉が出てこなかった。
話しかけてきたのは、昨日の学年トップの青年。
ただ昨日とは決定的に違う点がある。それは、
髪の色。
髪の先を尖らせたツンツン頭は右から順に
赤、橙、黄、緑、青、藍、紫と七色のグラデーションになっている。
それを自慢げに見せる青年はこう言う。
「どうだい？　金髪でも銀髪でもない、虹色の髪。さすがに俺の周りにはこんな髪の奴はいないんだが、　クロワの周りにはいる？」
「……馬鹿じゃないの？　いないに決まってるわよ。そんな変人」
その言葉を聞いて青年は嬉しそうに笑顔になった。
「じゃあ、約束通り、今日から俺たちは友達だ。よろしくな！　クロワ！」
「友達になるなんて約束してないわよ」
青年に差しだされた手を無視してクロワが言い放つ。
「えー、ここまでしたのにそりゃないよ！」

「あんたが勝手にしたんじゃない」
「そりゃそうだけどさ……」
本気で落ち込む青年にクロワは最後に言った。その顔はなぜかほころんでいる。
「あんたとはクラスメイト。それ以上でもそれ以下でもないわ」
青年の手を掴むクロワ。それは青年の変人ぶりに負けた瞬間だった。

トール・イーリス

通称『変人』
ツンツン頭を虹色に輝かす変人の青年はシャツをズボンから出し、ブレザーはボタンをはずして着崩している。学園指定のネクタイすらしていない。だが、その実態は、『学園』でもトップクラスの頭脳を持ち『黄魔法』を得意とする実力者である。『運営』という生徒自治を司る、いうなれば生徒会のような組織の会長にこの六月から就任したばかりだ。

六月二七日。
トール運営会長はその鮮やかな金髪を犠牲にして、
クラスで孤立する勤勉な一匹狼をクラスの輪に入れることに成功した。

『オーバード』

ランプ完成の当日。
クロワはベルスーズの中で怠け者が来るのを待っていた。
「ったく！　寄るところがあるから先に行ってろって、どこで道草食っているのかしら……」
「まあまあ、そんなに怒らないでください。ランプはどこにも逃げませんから」
隣でオレオルがクロワをなだめる。結局、オレオルの初恋は進展しないまま完成の日を迎えてしまった。まあ、三日で進展しろというのは、恋というモノを初めてしたオレオルには難しかったかもしれない。まして、相手は自分よりも年上の女性である。
すると、ようやくスロウが店に現れた。スロウの隣にはしわくちゃのランプ職人ランバダが立っていた。歳の割には背筋も伸び、力強さを感じる老人である。
「ららランバダさん！」
「久し振りじゃな、坊主。元気にしとったか？」
オレオルの驚きとは対照的に老人は笑顔で数年振りの挨拶を交わす。
「今日はお前さんが初めての器を作ったと聞いてな。見せてもらいに来たんじゃよ」
「オレオル。ランプを持ってきてくれ」
「は、はい」
オレオルはスロウに促され、店の机に布を被せていたランプを両手で大事そうに三人の元へ運ぶ。
「これです」
オレオルの顔には緊張がみなぎっている。
そのまま手を伸ばすランバダへ受け渡し、ランプを覆った布がオレオルの手ではずされる。

それは燦然と輝いていた。

まだ外は日が出ていて明るいが、オレオルの作ったランタン型の器は明かりを灯さずとも充分な光を放っていた。布を取り外した瞬間、店はランプの光を受けて華やいだ。

それは『リュミエール聖石』の輝き。

ドラゴンの力を浴びた特殊な石の輝きはオレオルが手を加えることによって、より力強さが増し他者を守る聖なる輝きに昇華されている。細部にまでこだわった装飾は神秘的な光を照り返しキラキラと夜空に浮かぶ星たちのようにまたたいていた。

「きれい……」

クロワの口から自然と言葉が外に追いやられた。

オレオルの作った器には人を惹きつける『何か』が備わっていた。その間、スロウはランバダから視線をはずさない。老人の細かな顔の表情の変化、手の動きを注意深く観察した。ランバダも睨めつけるように器を観察する。

「ふむ……」

ランバダは一呼吸置くと器をオレオルの手に返す。

「どうでしょうか……」

「逆にお前さんはこれをどう思う？　自分が作った器にどういった評価を下したんじゃ？」

質問で返されてしまったオレオルは、数秒、自分の手にある自作の器を見つめ、

やがて顔を上げ、ランバダに言いきった。

「完璧ではありません……ですが、今、自分の持てる技術、想い、全てを込めました。この器は今の僕に出来る最高傑作です」

「そうか」ランバダの顔に笑みがこぼれる。

「それでよい。完璧なものなど誰も作れん。だが、それでいいんじゃ。でなければ我々職人は日々成長することなど出来ん。職人の使

命とは一つ一つの作品に全力で挑み、今できる最高の物を作り上げること。それが職人という仕事と向き合うことであり、客と向き合うということじゃ」
　ま、ワシの持論じゃがの、と最後にちゃめっけたっぷりに付け加えると、
　今度はスロウへ向き直る。
「スロウよ。オレオルの作った器は見事なもんじゃ。今のワシにはこの短期間でこれほどのものは作れんかったかもしれん……まさか『聖なる灰』の器とは思わなかったがの。この器は立派な法具になる。しょぼい法師を使ってガラクタにせんといてくれよ？」
「ああ、約束する」スロウは普段見せることの少ない笑顔でランバダと固い握手を交わす。
　そしてスロウが目で合図すると、クロワはオレオルと向き合い、
「オレオルさん、では器を作ったあなたに、『名前』をつけてもらいます」
「え？　名前？」
「はい。聖なる灰というのはいわば聖剣や魔剣といった総称にすぎません。この器だけの名前を決める権利は商人でも法師でもなく職人に与えられた特権なんです」
「そうなんですか。それじゃあ……『オーバード』。というのはどうでしょうか」
「それは……どういう意味があるんですか？」
「『夜明けの曲』という意味です。皆が幸せな朝を迎えられるようにという願いを込めて」
「……詩人だな」
　スロウはその言葉に含まれる意味をなんとなく察したのかもしれない。けれど、そこにはスロウすら知りえないオレオルの心の内が秘められていた。
「素敵な名前をどうもありがとう」
（こちらこそ素敵な笑顔をありがとう）

言えない。
オレオルはどこかのちゃらい情報屋と違って簡単にそんなことは言えない。
だから、心にしまう。目の前の少女は三日前に見せてくれた笑顔をもう一度自分に向けてくれている。　それだけで、今は頑張った自分を褒めてやりたい気持ちになっていた。
オレオルは器をクロワに差しだす。あらゆる想いを乗せて。
「ありがとう。絶対すごい法具にするからね」
最後にそう言うとクロワはスロウの横へ歩いて行く。
別れは近い。
「オレオル」スロウが声をかける。
「はい」
「良い仕事だ。親父さんの分も頑張れよ」
「ありがとうございます」オレオルが深々とお辞儀する。
「完成したら知らせる。クロワを使ってな」
「……」
「ちょっと！　私はあんたのパシリじゃないのよ！」
スロウはそれだけ告げると坂道を登っていく。
クロワはガミガミとその背中を追いつつ振り向いて、
「オレオル！　また連絡するから！」と手を振った。
ボーっ、と手を振り返すオレオルを横にランバダが笑う。
「はっはっはっは！　お前さんも若いのう。そんな顔を見せられたら、ワシも昔を思い出してしまうわい。まあ、確かに可愛い娘さんじゃった」
「え？　あ、や、これは……ぼぼぼ僕がすすす好きなのはらららランプだけですからからから」
動揺を隠しきれないオレオルを見て、さらに笑うランバダ。
「いやいやいや、良いんじゃ、良いんじゃ。隠さなくて良い。それが健全な若者じゃよ」
「うう……」とオレオルは恥ずかしそうに茶の癖毛をかいた。

ようやく落ち着いたランバダが話を切り出す。
「お前さんもワシもあの二人に感謝せねばならんな」
「ランバダさんもですか？」
「スロウはワシが最近不甲斐ないことをどこかで聞いたんじゃろ。坊主のランプをワシが見ることで、触発されることを考えたんじゃよ。だから、こうして器の完成に合わせてワシを呼んだんじゃろ」
「そうだったんですか……さすがは『セブン・マーチャンズ』の一人ですね」
「なんじゃ、知っとったのか」
「最初は知りませんでした。一昨日クロワさんに聞いたんです。もの凄く驚きましたけどね。そんな大物が僕の所に来てくれるなんて」
「まったくじゃな」
「でも……、僕を見出してくれたのはスロウさんじゃなくて、クロワさんですけどね」

あの日のことがオレオルの脳裏に蘇る。

『待って！　私はオレオルさんに作ってもらうべきだと思う！』

そうクロワが言わなかったら、
器を作ることはなかったかもしれない。
今のこの充実感はなかったかもしれない。
彼女のことを好きにはならなかったかもしれない。

二人の見えなくなった坂の上を見つめながらオレオルはそんなことを考えていた。

『オーバード』（後書き）

『第一章』はこれでおしまいです。
いかがでしたでしょうか、
登場人物が多く、人物紹介で終わってしまった感はありますが、
キャラクターの名前をできるだけ覚えてもらえたらと思って、
サブタイトルに使ってみたりもしました。

最後の結末は考えていて、あとはそこにうまいこと着地できればと思っています。
三章構成でだいたい八万文字くらいを予定しています。

１０月には続きを投稿できるように頑張っていきたいと思います。
感想等もお待ちしております。
よろしくお願いします。
では、第二章でお会いしましょう。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

２０１１年６月３０日午前１１時３７分――とある喫茶店にて（前書き）

予定より少し早いですが、
出来たところまで投稿します。
良かったら読んでみてください。

２０１１年６月３０日午前１１時３７分――とある喫茶店にて

二〇一一年六月三〇日　午前一一時三七分

「んー……、当たりだ」

一〇番街にある小さな喫茶店。

入口すぐに小さなショーケースがあり、品数は決して多くはないが店主自慢のケーキたちが主張するでもなく、あくまで穏やかに並んでいた。「私を食べるのかい？　好きにしたまえ」というような余裕すら感じさせる佇まいだ。

アンティーク調の落ち着いた店内は客が一〇人も入れば席が埋まってしまうほど小さいが、席と席の間隔が広くとられており、ゆったりと居心地の良い空間が形成されている。その店の中には客が数人とスロウの姿がある。

スロウは自分の目の前に置かれたミルクレープと紅茶のケーキセットをまじまじと見つめると、二口目の準備を始めた。フォークがスーっとワンカットのミルクレープに吸い込まれていく。何層にも重なるクレープの生地とカスタードクリームをまるで伝説の職人が作った聖剣のような切れ味で容赦なく切断する。それを口に運ぶとスロウの顔は自然と幸せに満ち溢れたモノに変貌した。

（当たりだ……ここ数カ月の中じゃ文句なく一番の味だ。生地のしっとりとした食感とコクのあるそれでいてしつこくない甘さのクリーム。こういった新しい出会いがあるから食べ歩きはやめられない）

一度目は微笑み交じりにおもわず声に出してしまい、少なからず周囲の視線を集めてしまったが、今度は感想を心の中に留めておく。この数カ月間、スロウが行った店は正直ハズレが多かった。生地がパサパサの物や、ろくにクレープとクリームを重ねていない物もあった。そういったことが続いた中で、この出会いはスロウに、より大きな感動を与えた。

ちなみに、あえて言う必要もないだろうが、ミルクレープはスロウの『大』好物である。

普段の彼は自宅で寝ているか、街中の喫茶店を巡ってはその店のミルクレープ食べ歩くという生活をしている。『怠惰の王』と呼ばれる程のめんどくさがり屋の代名詞である彼が、わざわざ自分の足で店を探して食べ歩くという行為は矛盾としか言いようがない。

本来、ミルクレープが好物であるならば、超有名店の美味であることが約束された物を買い続ければいいからだ。

だが、スロウはそれをしない。

自分の足で苦労して見つけるからこそよりおいしく感じるということをスロウはわかっていた。まずいミルクレープとの出会いもその後の運命の出会いを美しく飾りつけるためには必要とさえ思っている節がある。

しかし、やはりその感情は怠惰とはかけ離れたところにあるものだ。

もしかしたらその感情は、まだスロウが『スロウス』を冠する前、ただの『アルカ・プラン』という男だった時のものだろうか。

「なあ、聞いたかよ、昨日、白騎士様が『コルネット』へ出発されたらしいぞ」

「ああ、それなら俺も聞いたよ。コルネットはホルン国内でもこの首都を除けば一番栄えている町だからな。無視はできねえだろ」

窓側、奥の席で男が二人、紅茶を片手に世間話をしている。おそらくこの辺りに店を構え、今は妻に店を任せて一休みしている店の主人だろう。平日の昼間に喫茶店で紅茶を飲む男の素性などは、服装と話している内容で大体見当がつく。

「けどよー、首都であるこの街の守備はどうなるんだよ。いくら、

四方の防御結界で守られているからとはいえ、『一年前』みたいなこともあるわけだしよ」
「そうだよなあ、この国で白騎士様以外の騎士はどこか頼りないもんな」
「わかるわかる！　いっそのこと、『フルート』にでも引っ越すか！　あそこは騎士団が強くて有名だろ」
「ばーか、こっから北のフルートまで、どんだけ距離があると思ってんだよ。それに店だったあるじゃねえか」
「わかってるよ。冗談だって！」
男が慌てて自分の前で両手をふる。その間もスロウはミルクレープとの対話を楽しんでいた。
「でもさ、唐突だよな。結界が弱まってきたから念のため騎士を派遣して下さい、だろ？」
「だな、コルネットにだって駐留している騎士がいるだろうにさ」
「普通はそうなる何年も前に新しい結界用法具の用意をしとくもんだよ。コルネットの人間は何をやってたんだろうな」
法具には耐用年数が存在する。それは法具の寿命とも呼べるもので、無論、中には半永久的に使える法具も存在するが、防御結界用法具には『平均八年』程度の耐用年数が設定されている。法具には作った職人、法師の実力によって年数に開きは存在するが、法具が現時点で後どれくらい使用できるかを判断する『鑑定士』という職業が存在し、その意見に委ねられることが多い。
今回のコルネットの件も昨年の鑑定では四人の鑑定士の意見が「あと五年は大丈夫」という見解で一致していた。それが先月に入り、法具の調子がおかしいことに気付いた法具の見張り番が独断で鑑定士に依頼したところ「あと半年で寿命が来る」という驚愕の鑑定結果がでたのだった。このことは国内でも大々的に取り上げられ、ドラゴンの脅威に怯えた人々がコルネットの街から引っ越すことが多くなった。
「ほんとだよ！　自分たちのミスで俺たちから白騎士様を取り上げ

ないで欲しいよ。商人には早いこと新しい結界用法具を完成させてもらいたいね！」
ちなみに法具にはそれぞれ製作期間というのが設けられている。ランクが高い法具ほど期間は長く設定されるのが通例だ。
防御結界用法具でも最高ランクである『聖なる灰』の製作期間は『二年』。
腕利きのランプ職人が少なく、順番待ちになることと、何より最重要材料『リュミエール聖石』の取得難度が非常に高いため、期間としては長めに設定されているのだ。そういった意味でも防御結界用法具の製作依頼は耐用年数を正確に鑑定し、年数的な余裕を十分見積もってしなければならない。
「その依頼を受けたのが、あの『怠惰の王』らしいから余計に心配だよ……噂じゃ、他のセブン・マーチャンズに断られたのが理由らしい」
「まじかよー、もしそれが本当だったら俺はその断ったっていう奴を恨むね！　そいつのせいで、法具が間に合わなかったらコルネットの町の人間はどうすんだよ」
この二人の男もまさか当事者であるスロウが聞いているとは夢にも思っていないわけだが、スロウはというと、あいかわらずミルクレープに夢中だ。

スロウが制作依頼の通知を受け取ったのが、六月二四日の朝。
今日で七日目を迎えるわけだが、すでに工程としては法師による魔力の注入作業だけである。
これは驚異的と言ってもいいスピードだった。
法師による魔力の注入はどんなに長く見積もっても二日はかからない。スロウは期間を『二年』と設定されているものを『二週間』もかけずに完成させるペースでここまで進んでいた。
（コルネットの法具もあと二か月は余裕だろう。ここは一度『あいつ』に頼んでみるか。それが一番楽だしな）

ようやく食べ終えて紅茶で一息つくと、ようやく仕事のことを考える。男たちは今もスロウに関していらぬ心配を語っているが、スロウが二人へ視線を移すことは一度もなかった。

２０１１年６月３０日午後７時００分――ホーム酒場にて

『商業の町コルネット』

ホルン王国の南西に位置し国内でも多くの人々で賑わう活気のある町で有名だ。普段から露店なども含めて多くの店が軒を連ねている。町の南には『トラン』と『ペット』という登山家には有名な双子山が隣接しており、大勢の登山客が麓にあるこの町を利用する。そのためか宿泊施設もかなり充実している。

白騎士は町を散歩していた。町長との会合まではまだいくらか時間があったので、途中で車を降りて町の様子を見ることにしたのだ。

「少ないな……」

町の大通りは人が行きかっているが、普段の状況に比べれば格段に人の数が少ない。中央市場は常時四、五千人の人間でごった返しているはずなのに、今は数百人いるかいないかといった状況だ。

かつて白騎士が見た町の状況との違いに言葉が自然と漏れてしまう。

周囲を見る限り木造の建物が多い。これではドラゴンの火球数発で、町は一面を火の海に姿を変えるだろう。白騎士は自然と腰に下げたパートナーの眩しく輝く黄金の柄を握る。

彼はスロウの実力を知る数少ない人物だ。間違っても法具の完成が間に合わないということは考えない。だが、

「せめて法具が完成するまでの短い期間は己の剣と技で守り抜こう」

守るべき町を実際に歩くことで白騎士はその意思をより強いものにした。

「ようこそいらっしゃいました、白騎士様。ささっ！　こちらへどうぞ。たいしたおもてなしもできませんが……」

町長の屋敷は周囲の建物よりもひときわ大きく、よく目立つもの

だった。
白塗りの豪邸を町長自らが案内し、白騎士は客間に通された。
「滞在中はこちらへお泊り下さい。幸い部屋の数だけは無駄に多くありまして」
壁に立て掛けてある絵画の値段は想像もできないが、白騎士の目から見て屋敷にある物はどれも一級品であることは理解できた。町長が笑いながらソファーに腰を掛け、白騎士もあとに続いて腰を掛ける。
「いやー、しかし助かりました。最近の町の人間は恐怖で眠れない者もおりまして。家に閉じこもる者もいます。白騎士様がいらっしゃったと聞いたら安心する者も多いでしょう」
「先ほど町を歩いているときに何人かには気付かれて挨拶されましたよ。でも法具はまだ数ヶ月はもつのでしょう？」
「ええ……、ですが怖いものは怖いのです。なんせ半年で耐用年数が四年分も下がってしまったんですから……何が起こるか分かったもんじゃありませんよ」
「最初の鑑定が間違っていたとか？」
「それは考えられますが、今の法具に変えてまだ三年程しかたっていません。ですから鑑定士の五年は大丈夫というのも納得の数字ではありました。逆にあと一年と言われたら不審に思ったかもしれませんね」
「たしかにそうですね。あとで実際に法具を見せていただいてもよろしいですか？」
「もちろんです。たしか白騎士様は鑑定士としても優秀な目をお持ちだとか。是非お話を聞かせていただきたい」
「そんなにたいしたものじゃありませんよ」
「お話し中、失礼いたします。コーヒーをお持ちしました」
そこまで話したところで専属のメイドがコーヒーを運んでくる。カップもかなり高価であることが窺えた。メイドは無駄のない動きで二人の手元にカップを置く。取っ手を利き手側に向けるところま

で自然とできるのはさすが町長専属といったところか。容姿も文句の付けどころがない。
「失礼いたしました」
そう言って銀のトレーを胸に当てて深々とお辞儀をすると、メイドは部屋から出て行った。
「……」
「どうされました？　あのメイドが気に入りましたかな？」
「いえ、そういうわけでは」
「二か月程前に雇ったのですが、これが良く仕事の出来る娘でね。私も助かっていますよ」
「そうですか……」
その後も他愛のない話を含めて三〇分程度白騎士と町長は話をしたが、白騎士は最後まで運ばれたコーヒーには口をつけなかった。

二〇一一年六月三〇日　午後四時一五分

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

二〇一一年六月三〇日　午後七時〇〇分

「なあ、あんたゴルドラさんだろ？」
「あ？　てめえは誰だ？」
「俺はトートっていうんだけど、あんたに聞きたいことがあるんだ」
話しかけるトートの手には二つのジョッキが握られており、それをゴルドラの手元に置いた。
カウンター席に座るゴルドラはそれに気分を良くしたのか、「まあ、座れや」と隣の席を促すそぶりを見せた。トートが席に着くと

互いに笑顔を作りジョッキを勢いよくぶつけ合った。ゴルドラはそのままジョッキの中身を一瞬で空にすると、
「それで？　俺様に何が聞きたいんだ？」
「『怠惰の王』について」
　カウンターの向かいにいるベストを着た男にトートが合図をするとゴルドラの元に新しいジョッキが置かれる。それと同時にトートの口からついた言葉にゴルドラの動きが止まった。
「そりゃあ、ビール二杯で話せる内容じゃねえな」
「そうか……じゃあ、これならどうだ？」
　トートがもう一度指を鳴らして合図をすると運ばれてきたジョッキには溢れんばかりの札束が入っていた。その光景に近くにいた客まで口をポカンと開けて視線を釘づけにされている。
「あんた、何者だ？」
「なあに、ちょっとした同業者さ。セブン・マーチャンズの情報だ。安いとは思ってないよ」
「そうかい。俺様としては報酬さえもらえりゃなんだって話すさ。こんだけもらったからには、俺様に話せることは喋らせてもらうぜ」
　そこからはスロウのこと。先代のこと。パートナーであるクロワのこと。ゴルドラは報酬に見合った情報をトートにありったけ話して聞かせた。
「いやー、さすがはゴルドラさんだ！　良い情報だったよ！」
「だろ？　あの男のことならなんだって知ってるぜ？　あんたみたいな羽振りのいい奴は大歓迎だ。また聞きたいことがあったら言ってくれよ」
「ああ！　よろしく頼むよ」
　元気よく手を振りかえすトートだったが、ゴルドラに背を向けてホームの酒場を後にすると、その表情は醜く歪んた。そのあまりの険しさに、彼をみた一人の少女が思わず小さな声で悲鳴を上げるほどだった。
（ふざけんな！　二度とあんたとは口をきくものか。自分の顧客情

報をああも事細かに話す情報屋がいるなんて……虫唾が走る！　ゴルドラが『先代』てやつが死んでから人が変わったっていう話は本当だったんだな。あの様子じゃ近いうちにスロウの奴も被害にあうだろうな）

2011年7月1日午前0時24分――コルネットにて（前編）

二〇一一年七月一日　午前〇時二四分

屋敷の中はすべての照明が落とされ、闇と静寂が支配していた。

赤髪のメイドはいつものフリフリのユニフォームで暗い廊下を灯りも無しに客間へと向かっていた。そこには白騎士が滞在している。

音もなく客間の扉までたどり着くと慎重に扉を開く。

実際は彼女の予想通りならそこまで慎重になる必要もなかった。彼女が三時過ぎに出したコーヒーは、片づけるときには空になっていたのをその目で確認している。あのコーヒーには遅効性の強力な睡眠薬を混ぜておいた。毒の強いものだと白騎士に気付かれる恐れを鑑みてあえて睡眠薬にとどめたのだ。あの薬を飲めばそう簡単には起きることもままならないはずである。

そこまで考えながらもメイドはすでに客間の中ほどまで足を進めており、白騎士のいる寝室とリビングを隔てる扉一枚というところだった。そして、金であしらえたドアノブに手をかけようとしたとき、メイドは背後にただならぬ視線を感じ、その手を止めた。

背筋が凍りつく。背後を見ることはできなかった。

「君のような見目麗しい方に夜這いをかけられるのは男として、とても光栄だが、騎士としてレディーはエスコートしたいものだな」

メイドはゆっくりと振り向く。暗闇の奥、壁に背を預ける男がいた。男を象徴する白い巻髪と純白のスーツが窓から差し込む月光を浴びて淡い光を放っているように見えた。

「なぜ……貴様がそこにいる」

「おやおや、貴様とは……もはや取り繕うつもりもないか」

「だが、なぜ……なぜだ。気付かれるはずは……」

「利き手」

「……なに？」

「君が私にコーヒーを差し出したとき、わざわざ取っ手を私の左側に向けた。どうして君は私が『左利き』だということを知っていたんだろうな」
「それは……あの時部屋で腰に帯剣しているのが見えたのよ。右腰に帯剣していたら普通は左利きと判断するわ」
「剣に疎いはずのメイドがそこに目がつくとは、さすが優秀だ。でも、あの時ソファーに腰かけていた私は鞘ごと外して横に置いていた。気づかなかったか？」
「……」
「つまり、君は私が帯剣している姿を『別の場所』で見たんだ。いや、実際は写真だったかもしれない。君は単純に標的である男の情報の一部として私が左利きなのを事前に知っていた。それが数か月のメイド仕事の結果、ああいう事態を招いた。どうだ？　私の推理は」
「ふっ！　探偵にでも転職した方がいいんじゃないの？」
「では、今度はこちらから質問だ。どうして私の命を狙った？　この町に潜伏している理由はなんだ？」
「貴様の推理力ならそんなことすでに理解していることじゃないのか？」
「そうか、ということはこの町の法具に細工をしたのは君か」
「ええそう。そして……、私はいずれこの町に来るであろう貴様を殺すために本部より派遣された」
　メイドはおもむろに一歩白騎士に近づくと、この二か月間愛用したユニフォームを破り捨て、本来の姿をさらけ出す。黒いローブはひざ丈ほどの長さで、両腕を覆う部分も肘程度までと機動性を重視したデザインだ。ローブの右胸の位置には銀糸でドラゴンにまたがる人間の紋様が描かれていた。
「我々は『ライダー』。ドラゴンの力をもって世界を支配する者」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ライダーとは『ドラゴンライダー』の通称である。
現在の人類の生活はドラゴンたちの脅威に常にさらされている。
それに対抗するために騎士や法師や職人は日々力をつける努力をしており、その結果、魔法の技術は向上し、それはそのまま科学技術の発展にも影響を与え、副産物的に生活の水準も上がり人類はより豊かになっていた。
それだけドラゴンの力は圧倒的であり、強大な影響力を持っているのだ。
そして、それを利用しようと考える者たちも必然的に現れることになる。
それが『ドラゴンライダー』と呼ばれる世界的テロ組織の名称である。
彼らがやることは簡単だ。町の防御結界用法具を破壊し、ドラゴンに襲わせる。
それだけである。町を壊されたくなくは、と脅しをかけるのだ。実際に魔法を使ったとしても人間の力でドラゴンを操ることはまだできていない。ゆえにドラゴンに対して間接的な干渉しかできないのだ。ライダーは裏では完璧にドラゴンを操るための人体実験を含むおぞましい実験、研究を繰り返しているという噂もまことしやかに囁かれている。

「我々……か」
白騎士は窓の外に新たな二つの気配を感じ取っていた。その気配から目の前の赤い髪の女も含め、かなり特殊な対人戦闘の訓練を受けていることがわかる。おそらく白騎士の部下でもこの三人と互角に戦える者はわずかだろう。
「我々としても戦闘力主義の騎士連合において『五本指』に数えら

れる貴様を、まさか一人で殺せるとは思っていないわ」
「薬を盛って、さらに三人か……ちょっと卑怯じゃないか？」
白騎士がひきつった笑顔になるが暗がりのせいで赤髪には見えていないかもしれない。
赤髪が右肩から片手用ロングソードを引き抜く。
剣身の腹の部分には一本の赤いラインが柄から剣先まで引かれていて、そこを流れるように古代文字が書き連ねられている。
「あまり人の家は壊したくないんだが……」
「そういって逃げるつもり？　悪いけど貴様に素性が知られた時点で生かしておくつもりはないわ！　実力で排除させてもらう！」
「元から殺すつもりだったんじゃないのか？」
「だまれ！」
赤髪は話す時間も惜しいといった具合に一気に攻めたてる。
白騎士は迫りくる鋭い凶刃を軽いフットワークでかわし、
あらかじめ開けておいた窓から外に飛び出す。
同時、左右から青髪の男と黄髪の男が同じくロングソードの剣先を向けていた。
彼らの剣にも赤髪と同じく剣身の腹の部分に髪色と同色のラインが引かれ古代文字が並ぶ。
待ち伏せの挟撃もギリギリまでひきつけてからひらけている前方へ回避する。
それらの簡単な行為も高速で行われることによって難易度は格段にあがる。
青髪と黄髪は瞬間的に視界から白騎士が消えたことに目を見開く。
互いの剣が交差し、刺し合う寸前で制止した。
避けた白騎士は涼しい顔で彼らの方へ向き直る。
窓から赤髪も外に出てきて青髪と黄髪の横に並んだ。
赤・青・黄
「ふっ！　まるで信号機じゃないか！　お前たちはいつもトリオで動いているのか」

「？　だったらどうしたっていうんだ！」
戦闘中だというのにこの男は何を言っているんだ、と三人のライダーは訝しんだが、
これが相手の策略かもしれないと思うと、より冷静な対処を迫られる。
「まず、俺がいく。二人は後に続け」
青髪が白騎士めがけて急激に距離を詰める。
その剣身の青いラインを指でなぞると青光が弾け、ロングソードが水流を帯びる。
間合いに踏み込むと横なぎの剣戟が白騎士を襲った。
白騎士は軌道を読むが、剣をかわしても不規則な軌道で続く水流が地面の石畳を抉る。
だが、それでも白騎士に命中することはない。
刹那、青髪の横に瞬間移動とも取れる速さで白騎士が移動すると青髪の腹に掌底をいれる。
「なっ……！」
言葉にならない言葉とともに青髪が一時戦線を離脱すると、
白騎士の背後を取ることに成功した黄髪が突きの姿勢をとった。
その剣は黄色の光の尾をひきながら白騎士に迫る。
さらに上空からは赤髪の赤く輝く炎剣が白騎士の頭を狙っている。
「まいったな……私は対人戦闘より対龍戦闘の方が得意なんだが……」
白騎士がようやく腰の黄金の柄に手をかけた。それを一思いに抜ききる。
プラチナであしらえた芸術品のようなレイピアの細い剣身を黒い液体が滴っていた。
白騎士はレイピアをそのままに、右手で鞘を外すとそれを上空の赤髪から背後の黄髪へ弧を描くように振る。すると中に入っていた黒い液体が赤髪と黄髪の顔にかかり、予想だにしない反撃を受けた二人のライダーはそのまま白騎士が先ほどまで立っていた場所で激

突する。
「ははは！　まるでコメディーだな。ライダーから足を洗って芸人になるというのなら、ここは見逃しても構わないぞ？　王にも推薦状を出そう」
「何を訳の分からないことを……それよりこれはなんだ？　いや、この匂いは」
「そうだ、お前が飲んだと思っていたコーヒーだよ。潔癖症の私にとっては耐え難い苦痛だったが、まあ後で入念に磨くとしよう」

２０１１年７月１日午前０時２４分――コルネットにて（前編）（後書き）

長くなったので途中で切りました。
中途半端ですみません。

２０１１年７月１日午前０時４３分――コルネットにて（後編）

くそ！　一方的に馬鹿にされる屈辱に三人のライダーは顔にでる怒りを隠しもせず白騎士をにらめつける。赤髪が黄髪に小声で耳打ちすると二人は距離をとり、ようやく戦線に復帰した青髪を含めて白騎士を中心に三方を囲む。

「あくまでその調子でくるというなら、それでもいい。次で終わりにする。我々がトリオを組んでいる本当の意味を知るがいいわ」

赤髪は上段。青髪は下段。黄髪が中段にそれぞれが得意の構えを取る。

三本の剣が今までよりも強い光を放つ。

「「「滅法混合！　アルモニーノワール！」」」

掛け声とともに三人のライダーが剣を振りぬく。

剣線は白騎士にはもちろん届かない。

それだけの距離があるが、剣先からは明らかに魔法の光が瞬いていた。

赤髪の剣からは炎。青髪は水。黄髪は雷。

髪色に体現されたそれぞれの得意魔法が中心にいる白騎士を狙う。

白騎士はそれを上方へ跳躍して回避する。『跳ぶ』というよりは『飛ぶ』の方が相応しい。

常識離れした跳躍力は本来ドラゴンとの戦闘でこそ異観なく発揮される。

その姿を見たものは、人類が空を飛べる生物ではないかと錯覚するほどだ。

だが、それを見た赤髪は口元を歪め、この戦闘が始まって以来の笑みをこぼす。

「かかったな！　白騎士！」

直後、三色の魔法は中心で交わるとお互いが打ち消しあわずにその場に滞留する。
そして、その色を黒く染めていく。
「！」

白騎士の真下。停滞した漆黒の渦は恐ろしい勢いで夜空へ向かって突き上がった。

魔法が色で呼称されるのにはいくつか理由がある。
その理由の一つに混ぜ合わせることによって、別の性質の魔法に変化するからというモノがある。
生物は生まれたときから個々に自分の属性色を持ち、それ以外の色の魔法は使うことは出来ても、法具の力を全て引き出すことは出来ない。
例えば、白騎士と対峙している赤髪の属性色は『赤』。
それ以外の色の魔法は日常生活では使えてもハイレベルな戦闘ではまるで役に立たないのだ。
だが、『赤』の属性色を持つ人間が『黒』の属性色を戦闘レベルで使うことが限定的に可能な場合がある。
それが『混合（ルールン）』である。
別の色と混ぜ合わせることによって性質を変えるという極めて高度なテクニックではあるが、これを使えば、赤魔法を使いながら黒魔法を使うことが可能になるのだ。

攻撃範囲とスピードからして避けることは不可能。
回避不可能な最強必殺技の発動にトリオは勝利を確信した。

「見事……。感嘆せずにはいられないな」

その直後、夜空よりも深い漆黒の渦が二つに割れた。

「「「なっっっっっっ！」」」
三人の見上げる先でレイピアによる突刺を地上に向けて繰り出した白騎士の姿があった。
開いた口の塞がらない三人の視線を釘付けにしたまま、白騎士は地上に着地する。
そのスーツは彼の二つ名を体現するように汚れなき純白を保ち続けていた。
「混合は互いの魔法のバランスや法具の性質など複雑な事象が絡み合うはずだが、それをこれほどの完成度で実戦に投入するとは、中々やるじゃないか。芸人発言は撤回しよう」
「くっ！　しらじらしいわね！　それを簡単に打ち破っといて良く言うわ！　くそっ！　白魔法の使い手に黒魔法は相性が悪かったか」
「白魔法？　勘違いしているのかもしれないが、私の属性色は『白』ではないよ」
「な……に？」
「ふっ、君たちのように髪色がそのまま自身の色を表すような単純なことをする筈がないだろう。それに――」
「それに？」

「人間相手に魔法を使うつもりはない」

このとき、三人はようやく理解した。
騎士というのはあらゆる職種の中で最も戦闘力を必要とする仕事。
その中において片手で数えられるほどの実力者となると、
それは文字通りの世界最強と同じ意味を持つ。
たった三人で、いや、人数の問題ではない。
この男と戦うつもりならドラゴン級の戦力を投入するか、
国家クラスの力を用意しなければいけなかったのだ。
「最初から相手にしてはいけなかったということか……」
赤髪が全てを悟るころ、白騎士は青髪と黄髪をほぼ同時に打ち倒

し、赤髪の前へ横たわる二人の男が並べられた。かすかに息がある。まだ死んではいないようだ。もはや赤髪には抵抗する気力もおきない。俯き、覚悟を決めた赤髪に向かって白騎士がおもむろに口を開く。

「そういえば、まだ聞いていなかったな」

「？　なにをだ？」

「私を殺そうとした理由だよ。最初から法具を壊さずに、私を誘いだした理由はなんだ？」

「……『一年前』、首都フリューゲルの結界用法具を破壊してドラゴンに襲撃させたことがあった。だが、貴様に阻止された。法具を壊しても貴様をどうにかしない限り、ホルン国内での活動は意味がないという結論が上層部で下されたのだ」

「やはり『一年前』の事件もドラゴンライダーの仕業だったか……だが、残念だったな。今回もお前達の負けだ」

その場に膝をつく赤髪の女を前に白騎士は思う。「残念だった」という言葉の意味。

一つは自分を殺せなかったこと。

もう一つは自分をたとえ殺せたとしても、それであの街が墜ちることはないということ。

あの街にはもう一人、ドラゴンと戦える者がいる。

実際に『一年前』の事件を解決した男。

おそらく、ライダーの上層部にも事実の情報は入ったのだろう。しかし、実際に目で見ていないがために情報に信憑性が持てなかったのだろう。あの男の凄さというのはその眼で見た者にしか伝わらない。それが白騎士には良くわかるのだ。

『一年前』までは彼自身がそうであったから。

赤髪はわかっていた。

あの日、『一年前』の七月七日。

戦況を左右したのが白騎士ではなかったこと。

赤髪は青髪、黄髪とともにその戦いを観察していた。
彼らが見た戦場で一際存在感を放っていたのは、
白いスーツではなく、赤いコートに身を包んだ男。
スロウス・アルカ・プラン。
『怠惰の王』とよばれる男だった。

二〇一一年七月一日　午前〇時四三分

真夜中の戦いは静かに幕を開け、そして閉じた。

2010年7月7日午前7時3分――『一年前』

二〇一〇年七月七日　午前七時三分

テレサ・アルバニアという名の新任教師は早朝の街をある場所へ向かっていた。

空は昨日まで降り続いた雨が嘘のような快晴で朝露に濡れる木々を陽光が優しく照らしている。小鳥たちのさえずりとテレサのヒールが石畳をカツコツと鳴らす小気味良い音、そよ風になびく木々のざわめきが互いに響き合って街はさながら小さな演奏会といったところだ。

新たな出会いの日に今日程うってつけの日はないだろう、とテレサは今日のこれから起こることを想像して年がいもなくワクワクしていた。といっても彼女自身、三カ月前に『学園』を卒業したばかりのピチピチの一〇代の女性である。在学中に法師と教職のどちらの免許も取得したただ一人の人間だ。

「わぁー、め、女神様だ……」

目的地の前で早朝から遊んでいた少年少女が向かってくるテレサに気付いて動きを止めた。

長い銀髪は本物の銀となんら変わらない輝きを放ち、眼鏡の奥のマリンブルーの瞳は溺れてしまいそうな魅力に溢れている。背中に朝日の光を纏うテレサは、少年たちが見間違うのも不思議でないくらいに神秘的であった。

「あなた達はいつもここで遊んでいるの？」

「ううん、今日はたまたまだよ、じゃなくてたまたまです」

少年少女が揃って姿勢を正す。もしかしたら朝からうるさくしていたのを怒られるかもしれないとでも思ったのだろう。だが、彼ら

の予想を裏切るようにテレサは笑顔で、
「ふふっ！　そうなの。じゃあ、お姉さんから一つお願い事しても良いかな？」
「なあに？」
「このお家に住んでいるのは私の友達なんだけど、すっごくお寝坊さんなの。だから、早起きの君たちに起こしてもらいたいのよ」
「え？　いいけど、さすがに人の家に勝手に入るのはまずいんじゃ……」
「そんなことしなくても大丈夫よ。ここで元気よく遊んでくれたら、その声で起きるはずだもの。だから、これからもここで元気よく遊んでね」
「そっか！　そういうことならお安い御用だよ！　女神様のお願いだもん！　なっ！」
「「うんっ！」」
三人は満面の笑みでテレサを見上げ、テレサもお礼の意味を込めて笑顔を返した。
「さてと、これだけ家の前で騒いだからさすがに起きたかしら」
テレサは少年少女が見守る中、扉を開く。

「外がとってもうるさいんだけど……」
起きていた。広いリビングには木製の大きなテーブルと四脚の椅子。そしてソファーベッドには、赤い毛布に包まった人間の大きさをしたみの虫のような変な生き物がいた。
「これからはずっと賑やかになるわよ。良かったわね。これで朝も起きられるわね」
「……俺はお前と違って朝早く起きる必要はないんだけど」
「早起きは三文の得っていうでしょ？」
「得したことない」
「その言葉はまず起きてから言いなさい！」

テレサの口調が徐々に教師のそれに変化してきているが本人にはまるで自覚がない。
「それより、いつまでそんな格好してるのよ。今日何するかわかってるでしょ？」
「……本当に行かなきゃ駄目か？」
スロウは毛布から出ようとせず、若干、ソファーから上目づかいでテレサを見上げる。まるで、学校に行きたくないからとズル休みを親に懇願する子供と一緒である。三カ月前までクラスメイトだった二人の関係はこの場面だけ切り取ってみると、もはや親子のようにすら見えた。テレサは思わずため息をつく。
「あのねぇ……、あなたが『先代』との約束を守りたいからって私に言ってきた話でしょ？　自分だけじゃ無理そうだから手伝えって」
「そうだけどさ……」
「そうだけど、何よ」
「めんどくさいじゃん」
その言葉の最後にスロウは何かが切れる音を確かに聞いた気がした。
気がつくとスロウは毛布をひき剥がされ、いつでも家を出られるように身支度をすませていた。スロウが自分でやったのではない。今の一瞬でテレサがやったのだ。
「さ、行くわよ」
テレサに赤いコートの襟首を引っ張られながら、二人は少女の待つ『学園』へと向かった。
これはスロウとクロワが聖なる灰を製作する『一年前』の出来事である。

2010年7月7日午前7時12分――首都フリューゲル街壁にて

二〇一〇年七月七日　午前七時一二分

首都フリューゲルを高く囲う街壁。その東西南北の最上部四か所にはそれぞれ三つずつ計一二個の『聖なる灰』が設置され、ドラゴンを遮断する強固な結界を張っている。実際はその半分でも首都全体を覆うには十分な結界を形成できるが、有事に備えて倍の数が設置されている。

「どう？　そちらは首尾よくいっているかしら？」

赤髪の女は短めの黒いローブを身に纏い、南の城壁の上で複数人と同時に通信を可能にする小型端末を耳にあてる。彼女の足元には数分前、背後からの攻撃によって殺害した二人の騎士が横たわっている。

「ああ、問題ない。たった今交代を終えた騎士二人の息の根を止めたところだ」

端末の先で青髪の男が言葉少なに端的に話す。

「そう、で？　あんたはどう？」

「俺か？　こっちもバッチリだ。早く帰ってカレーが食べたいぜ！」

黄髪の男は城壁の端に座り足をブラブラと振りながら端末に向かって答えた。

「あんたねぇ……髪が黄色いからってそういう露骨なキャラ設定はやめなさいよ」

「え、いや、そういうんじゃなくてほんとに好きなんだけど」

「それとさっきから黙ってるけど、お前も髪が青いからってクールぶるのやめてよね。そういうキャラ設定も必要ないから」

「……いや、俺もそんなつもりじゃ……」

「いい？　私たちは芸人じゃないのよ？　誇り高きドラゴンライダ

ーなの！　世界を支配し、私たちが世界を統治するの！　人類を導くのよ！　マジ燃えるわ！」
「「てめえが一番キャラ設定してんじゃねえか！」」
「えっ！　べ、別にキャラ設定なんてしてないんだからね！」
「キャラ設定どころか、もはやキャラが崩壊しかけてるんだけど……」黄髪。
「うっさいわね！　法具は壊したんだからさっさと退くわよ。この街の崩壊を高みの見物でもしてましょ」
「それは構わないが、残る北の三つはどうするんだ？」青髪。
「あれ？　言ってなかった？　北は現地の協力者に任せてあるの。警備の騎士の交代時間や侵入経路の情報はそいつの提供よ」
「誰なんだよ。そいつ」黄髪。
「さあ、上層部の決めたことにいちいち疑問をもってたら何もできやしないわよ」
「お前のそういうとこ、なんかこう……クールだよな」青髪。
「なっ！　クールなわけないでしょ！　芸人じゃないのよ？　誇り高きドラゴンライダーなの！　マジ燃え――」
「「もういいから！」」
三人のライダーは集合場所を確認すると、街壁から姿を消した。

同時刻、『バルブ炭鉱』。その奥深くでは数頭のドラゴンが眠りについている。
中でも一際大きく群れのボスであろう一頭は、遠くフリューゲルの街に起きた異変をかすかな空気の流れから感じ取っていた。ドラゴンの分厚い赤褐色の瞼が開き、金色の鋭い瞳が顕わになる。
それはドラゴンによる恐怖が街を支配する前兆だった。

２０１０年７月７日午前７時１２分――首都フリューゲル街壁にて（後書き）

短くてすみません。

２０１０年７月７日午前７時４５分――生徒指導室にて

二〇一〇年七月七日　午前七時四五分

スロウは懐かしい校舎の廊下をテレサに引きずられていた。

「なあ、ちゃんと歩くから引きずるのやめてくれない？」

「あら、歩くのもめんどくさいのかと思ってたわ」

「ここまで来たら帰る方がめんどくさいよ」

その言葉を聞いたテレサは唐突に赤いコートの襟首から手を放し、ドサッ！　という音を立てて背後で倒れるスロウを無視して『１―Ｃ』の教室を目指す。

スロウもゆっくりと立ち上がり軽く服をはたいてから後を追う。彼にとっては三か月ぶり、一年生のフロアを最初に歩いたのは実に三年も前のことになる。何とも言えない感慨がスロウの中にこみ上げる……ことはない。今年の卒業生にスロウ以上の不真面目な生徒はいなかった。いたとしても『学園』を辞めている。出席日数もテレサと比べれば半分にも満たないかもしれない。まあ、それには別の理由もあるのだが、それはまた別の話である。

二人が『１―Ｃ』の教室の前に来ると、一七、八人の生徒がすでに来ていて今日の予習をしている様子が覗えた。授業開始時刻が九時の『学園』に、この時間に来ているのはほとんど真面目な生徒である。一年時の定期考査の結果で、その後のカリキュラムに大きな影響を与えるとあって生徒も必死になる。予習をする生徒の他には窓側の後ろの席で三人の少女が楽しそうにおしゃべりをしていた。テレサはそこに視線を向けつつある少女の名前を呼んだ。

「クロワさん！　ちょっとこっちに来てもらえる？」

「あ、はい！」

二人の元へ歩いてくる少女は誰が見ても羨む整った顔立ちをしており、綺麗に揃えられた黄金色の短い髪は首元でカールしていて、

二重のぱっちりした目が活発な印象を与えていた。紺色のブレザーとスカートから時折のぞく透きとおるような白い肌は妖精や天使といった神秘的なものを連想させる。
「クロワ、朝早くからごめんなさいね。私について来てもらえるかしら」
二人を連れたテレサは一階の奥、『生徒指導室』の前で足を止めた。さすがのスロウもここには想うこともある。なにせ、教室よりも多く通った記憶があるくらいだ。「懐かしいな……」と不意に言葉が口をついてでる。逆にクロワにとっては全く馴染みのない部屋だ。
「あのー、私ここに呼ばれるようなことしたでしょうか……」
「ううん、クロワは何もしてないわよ。ただ落ち着いて話せる場所が欲しかったのよ。ちょっと場違いかもしれないけど我慢してね」
不安そうなクロワの肩にそっと手を置きテレサが微笑みかける。
「さ、二人とも入って」
部屋の中は応接セットが一組あるだけの小さな部屋だった。それ以外には何もなく、初めてこの部屋に入る人間は生徒とただ話すためだけに設けられた部屋だという印象を強く受ける。
テレサに促されるままスロウとクロワは机を挟んでソファーに向かい合って座る。中央の机の横にテレサが立つと二人を順番に紹介した。
「この子が私の押すクロワ・エイヴリッヒさん。今年の四月に入った新入生よ。先月あった最初の定期考査で総合第三位。すごいでしょ？」
「……」スロウは興味もなさそうにクロワをじっと見る。
「そしてこっちが『セブン・マーチャンズ』の一人。スロウス・アルカ・プランよ。名前くらいは聞いたことあるかしら？　私の同級生にセブン・マーチャンズがいるって話したことあったわよね？」
「あ、はい……『先代の七光』とか『怠惰の王』とか言われている……」

「先代の七光は初耳だな……そんなのも増えたのか」
空気が悪い。
スロウは世間的な評判は最悪だし、スロウ自身もそれを認めている。その結果が今の形容しがたい重い空気を発生させていた。やはり場所も悪い。『生徒指導室』は本来明るい話をする場所ではないのだ。口にしたクロワも初対面の人間にいきなり言うことではなかったと今更ながらに口に手を当てて動揺していた。テレサは一度大きく咳払いをすると、強引に仕切り直そうとする。
「オホンッ！　まあ、それは置いといて、クロワに会わせたい人がいるってこの前言ったわよね？　それがこのスロウよ。――クロワ、単刀直入に言うわ。あなたスロウとコンビを組まない？」
「……え？」
「バカ、直球すぎだろ。それじゃ誰が訊いても混乱する」
「うっ……確かにそうね……」
「はぁ……、俺は今パートナーを探しているんだ。これは先代の遺言でな、パートナーと行動を共にすることで学ぶこともあるだろうってことらしい。そしてパートナーは自分とは正反対の性格じゃなきゃ駄目らしいんだ。真面目な師匠が俺を選んだように」
「それで私……ですか？　テレサ先生じゃ駄目なんですか？」
「こいつは君が思っているほど真面目じゃ――」
ドスッ！　と鈍い音がした。クロワには聞こえていないようだ。
「（あまり余計なことは言わないように。華の教師生活に問題を生じさせるようなことはしないでね？　もう手伝ってあげないわよ？）」
「（……了解した）」
「？」
二人の小声のやり取りにクロワは首を傾げ、それに気づいたテレサが慌てて話を戻す。
「この数か月、クロワのことを見てきたけど、勤勉で努力家。アルカ……いえ、スロウ君とは対照的だと思う。スロウ君とコンビを組

むことであなたが得ることも必ずあると思うわ」
（めんどくさがりと組んで学ぶことなんてあるのかしら……反面教師ってことかな）
クロワは自分の中にある確かな疑問を口には出さずにぐいと飲み込んだ。
「少し、考えさせてもらえませんか？」
「そうね、話が急すぎたわ。スロウ君も少しは待てるでしょう？」
「ああ、問題ないよ。どれくらい待てばいい？　二、三年か？」
「待ちすぎよ！　クロワ、一週間くらいでいいかしら？」
「はい。ありがとうございます」
「俺のパートナーを決めるんだから、俺がいくら待ったって良いじゃないか」
「あなたのは単純にめんどくさがっているだけよ」
本当に二人がコンビを組めばいいのに。息もピッタリじゃないか、とクロワは思った。前にもテレサから同級生にセブン・マーチャンズがいることは聞いていたし、何よりその話をする時のテレサがとても楽しそうだったのを思い出した。
（それだけ魅力的な人なのかな……）
クロワがパートナーを組むことに関して真剣に考えているとき。
それは、
あまりにも突然。
「グガァーーーーー」
「「――えっ！」」
声を出したのはテレサとクロワだった。これまで聞いたことのない『何か』の咆哮が部屋の窓ガラスを大げさに振動させ、校舎全体を揺るがす。
「何これ、地震？　今の叫び声は？」

クロワの疑問を確かめるため、慌ててテレサが窓に近寄る。その光景にテレサは自分の体が急激に震えだしていることを理解した。
「そんな、嘘、でしょ……」
「いったいどうしたっていうんですか？」
「ドラゴンよ。正確には幼体である『リザード』級が四体。成体の『ワイバーン』が一体。この窓から確認できるのはそれだけね」
「えっ！　どどど、どういうことですか？　結界は？　街の中にドラゴンなんてありえないですよ！」
「結界がどうなったのかはわからないけど、現状、街にドラゴンがいるという事実が変わるかけじゃない……クロワ、あなたは地下のシェルターに避難しなさい。大丈夫。防護の面ではこの街で『王城』と『学園』は一番安全な場所よ」
「先生はどうするんですか？」
「ドラゴンが進む先にスタジアムがあるわ。今は部活動の朝練をしている生徒もいたはず。私は彼らの救護に向かうわ」
「そんな！　危険です！　騎士たちが来るまで待った方が」
「そんな時間はないのっ！」
めずらしく語気を強めたテレサにクロワは肩をビクッと震わせる。テレサ自身も怖いのだ。あまりにも突然現れた死の恐怖をそう簡単には受け止められない。それでも『教師』として、生徒を守らなければならないという使命感が彼女を突き動かしていた。
「アルカ、シェルターまで彼女を送って……お願いね」
眼鏡の奥の瞳に使命感と恐怖を湛えながら生徒指導室を走り去る。
「……」
突然のことにクロワは思考が追い付かない。部屋の外では生徒と教師の怒号が絶えず響いている。登校途中の生徒たちや近所の住民が慌てて校舎に駆け込み、人数は数分前よりも格段に増えていた。
「シェルターまでは一人で行けそうか？」
「え？」
不意に、それまで沈黙を貫いていたスロウが口を開く。

「ここからだと東階段を降りるのがはやい。行けば教師もいるだろうから指示に従っていればいい」
「ちょっと待って！　あなたはどうするんですか？」
「スタジアムへ行く」
「そんな……危険ですよ！　一緒に避難しましょう！　テレサ先生もそう言っていましたし」
「……この『学園』の教師は優秀だ。でも常勤の五〇人で、ドラゴンとの戦闘経験があるのは一〇人と満たない。テレサもドラゴンを直に見るのは今回が初めてだろう」
「……」
「ドラゴンとの戦いで最も重要なのは経験だ。初見の戦いは恐怖に足が竦んで、まず本来の実力を発揮できない。だから経験を積む前に死んでいく奴がたくさんいる」
「そんな……」
「お前はテレサやほかの生徒をドラゴンに殺されたいのか？」
クロワは言葉にならない言葉とともに首を激しく左右に振って意思表示をする。
「なら、行くしかないだろ。めんどくさいけどな……。行かずに後悔する方がもっとめんどくさい」
「あなたなら……ドラゴンに勝てるの？」
それは願いにも似た言葉だった。
先ほどまで『先代の七光』とその実力を疑っていたはずの、出会ったばかりの男に、
すがりつくような目で少女は尋ねる。
「この世に絶対なんてない。約束はできない」
「……」
「でも、俺が行くことで誰かが死なずに済むのなら、立ち止まるわけにはいかないんだ」
背中越しにそう語ると扉を開け、スロウは廊下を駆け抜けていく。クロワも続いて廊下へ飛び出すが、人で溢れかえる廊下の喧騒の中

にスロウの姿は既になかった。

２０１０年７月７日午前７時４５分――生徒指導室にて（後書き）

今度は長くなりすぎました。すいません。

２０１０年７月７日午前７時５０分――騎士団詰め所にて

二〇一〇年七月七日　午前七時五〇分

ホルン城内騎士団詰め所。白騎士は窓の外を注視しながら部下の報告に耳を傾ける。

「団長！　報告です！　街壁に設置していた結界法具一二機全ての破損による機能停止、及び警備の騎士、八人全員の死亡を確認しました。すぐに新たな法具による結界魔法を展開させます」

「駄目だ。すでにドラゴンが侵入している時点で結界を張ってもドラゴンが逃げ場をなくすだけだ。結界を張るのはドラゴンを全滅させた後か、ドラゴンが街を去ってからだ」

そこへ別の甲冑の騎士がやってくる。

「報告します。首都フリューゲルに侵入したのは成体『ワイバーン』級が一体。幼体『リザード』級が七体の計八体であり、現在、ドラゴンの群れはまっすぐに『学園』に向けて飛行を続けておりますが、三体の『リザード』が群れを離れて行動をしているようです。具体的な被害報告はまだありませんが、市民はみなパニックを起こしています」

「ワイバーンが一体というのは助かったな。成体を二体以上も同時に相手をするのは少し骨が折れる。『学園』には模擬戦や、魔法戦を行うためのスタジアムがあったな、あそこにドラゴンをおびき出して戦えば街の被害は最小限で済むだろう。お前たちは部隊を三つに分け、装備を整え次第『学園』に向かえ。市内へ向かう部隊は市民の避難誘導を怠るなよ。すでに市内で交戦中の騎士たちの援護も急げ。人選はガウェイン。お前に一任する」

「了解しました。団長はどうするのですか？」

「私は一足先に『学園』に向かう。お前達が来る前に数を減らしておこう」

そこまで言うと窓から向き直り、詰め所全体を見渡す。数百人の甲冑の男たちが白騎士に注目していた。その顔つきは勇ましく、猛々しく、誇り高い騎士の顔だ。

「いいか！　この戦いに勝者などは必要ない！　大切なのは市民の命。それを忘れるな！　我々は戦いを職務とするから騎士だというわけではない。守るものがあるから騎士なのだ！　諸君！　ホルン王国騎士団の騎士道をここに示せ！」

白騎士は言葉とともに腰から黄金柄のレイピアを引き抜き天高くかざす。騎士たちもそれに呼応し、その手にある剣を突き上げながらドラゴンに勝るとも劣らない雄叫びをあげる。

騎士たちが着々と行動に移る中、部屋を埋め尽くす騎士たちの所為で白騎士と詰め所の出口の距離はいつもより遠い。

時間が惜しい。白騎士は単純な答えを出す。

「では、私は先に行く」

そう告げながら、窓を開けると詰め所に一迅の風が吹き込み、白騎士は窓からその身を投げ出した。地上までの高さはゆうに三〇メートルはくだらない。

だが、心配する者は誰もいなかった。

騎士たちの意識がドラゴンと守るべき市民に向けられているからではない。

単純にその程度でどうにかなる訳がないと知っているのだ。

『騎士連合』最強の五人。

通称『五本指』。

そこに名を連ねる一人の騎士が今、戦場に一迅の風を運ぶ。

2010年7月7日午前7時52分――スタジアムにて（前編）

敷地面積二〇万平方メートル。収容人員十五万人。『四大機関所属人材育成学園』の校舎に隣接する『スタジアム』と呼ばれる施設は、学園に通う生徒たちの体育の授業をはじめ、魔法戦、肉弾戦等の模擬戦や学園特有の授業を行うための施設である。そのため、強度に関しても『王城』と同等の強固なものであり、実際にドラゴンとの戦闘にも耐えうるだけの強度を誇っている。また、その広さゆえに国を挙げての一大行事にも使用される。

二〇一〇年七月七日　午前七時五二分

現在は、学園の運動部に所属する生徒たちがいつも通り朝練をしている――はずだった。

「キャアッ！」

「急げ！　立ち止まるな！　早く屋内に退避するんだ！」

逃げ惑う生徒の悲鳴、教師の怒号。幼体『リザード』の雄叫び。スタジアムに響く数多の声。

リザードはまだ成長途中とはいえ、その充分な巨体は見る者を圧倒し、恐怖を植えつけるには充分過ぎる存在感を放っていた。

「あっ！」

一人の運動着に身を包んだ女生徒が人口芝に足を取られグラウンドに倒れる。

「あ……あぁ……」

空を見上げればそこには赤いゴツゴツとした鱗に覆われたリザードの顔前。

女生徒とリザードの目がピタリとあった。腰を抜かして動くことができない。

「ちくしょう！」

女生徒を助けようと男子生徒がスタジアム中央へ駈け出す。男子生徒の手に握られた細い指揮棒程の杖から黄色い閃光が放たれると空中で雷の矢になり、リザードの額に命中する。しかし、リザードの視線は依然として変わらない。その程度ではリザードの意識を女生徒から逸らすことはできない。それでも足を止めない男子生徒の頭上を無数の白い矢がリザードめがけて突き抜けるとリザードに命中。だが、今度は直撃と同時に眩しい閃光が弾け、リザードの巨体をグラリと揺るがす。

リザードの視線が男子生徒の奥にいる者に向けられる。

男子生徒も釣られて振り向くと、その先にいたのは今年教師になったばかりのテレサ・アルバニアという教師だった。銀髪の女教師はその目に覚悟を宿しながら男子生徒に叫ぶ。

「走りなさい！　早くその子を安全な場所へ！」

「は、はい！」

慌てて男子生徒が走りだすのを確認するとテレサは瞬時に両手の指の間に白いチョークを挟み込む。計六本の白いチョークを構えるとリザードと睨み合う。

「グオォーーーーー」

テレサの背後から二体目のリザードが雄叫びをあげる。そして先ほどの男女の生徒を三体目のリザードが狙っている。さらにもう一体、これは他の教師によってなんとか食い止められていた。全部で四体。とてもここに居る教師たちで防ぎきれる数ではない。

「迷っている時間はない！」

テレサはすぐさま攻撃に転じ、正面にいるリザードめがけてチョークを打ち込んでいく。白光の尾を引きリザードに吸い込まれるチョークは確実にダメージを与えていく。だが、背後からの火球がテレサの近距離で地面に直撃し、その衝撃波によってテレサの体は宙に浮き、数十メートル飛ばされスタジアムを囲う観客席に叩きつけられる。

「うぐっ……」

激しい衝撃にまともに息をすることもままならない。
そしてその場から見えるのはあまりにも残酷な光景。
倒れる数人の教師。
逃げ惑う生徒たち。
（……立ち上がりなさい、テレサ！　今立ち上がらずにいつ立つの！）
動かない体をただ意志だけで突き動かす。それでも思うようには動かない。
「やめろ！　くるな！」
先ほど逃がしたはずの二人が再びリザードの標的にされている。
そのままリザードは二人の逃走路を阻み鋭い牙をむき出しにする。
逃げることを諦めた生徒が再び細い杖をリザードに突きつける。
「やめなさい！　逃げるの！　逃げるのよ！」
テレサの痛烈な叫びもその距離では届かない。

「せん……せい……」

確かに聞こえた――気がした……
最後の最後、テレサの叫びが聞こえたかのように青年はテレサの方をむき、
そう口が動いていたようだった。
その直後、リザードの口の中に男子生徒は消えた。

「いやあああああ！」
テレサの悲鳴がスタジアムに木霊する。
朝感じた素敵な一日の始まりの予感は簡単に覆された。
力なくその場に膝をつくテレサに立ち上がる気力はない。
その頬を悲しみの雫がつたう。
だが、叫び声に反応した四体のリザードのうち三体が自分の獲物を捕られまいと我先にと空を駆ける。スタジアムが広いとはいえ、

その距離はあっという間に縮まる。テレサの思考はすでに停止している。周囲にも彼女を助ける余裕のある者もいない。
三体の口が同時に開く。
三つの地獄への入口はどれを通っても待っているのは『死』という出口。
あの生徒の結末と同じ出口。
それもいいか、とテレサは思う。生徒を救えなかった自分に生きる価値も資格もない。一つの口にはあの生徒の物とおぼしき細い杖が挟まっていた。最後までドラゴンの脅威に抗い続けた青年の杖。
「立てよテレサ！　お前の助けを待つ生徒が見えないのか！　お前の力は何のための力だ！」
同時、急速に伸びる白と黒の刃。
それにによって二体のリザードの首が真っ二つに両断される。
残るは最後の一体。あの生徒を殺したリザード。
「私は……私は……」
リザードは顎門を開き、咆哮とともに右翼の鉤爪をうずくまるテレサの顔に打ち降ろす。
ガキンッ！　と甲高い金属音のようなものが周囲に響く。
とても人間の顔に当たった音ではなかった。
リザードの顔にかすかな疑問の色が浮かび上がる。
その爪はテレサには届かない。
両者の間には薄い光の膜が張られていて、膜の四方の隅に白のチョークが宙に浮いている。
それがテレサを恐ろしい一撃から守っていた。
法師専用法具『テミス』
教師であり『法師』でもあるテレサの法具は、騎士や商人といっ

た者達が使う物とは異なり、用途が一つに限定されない。通常は法師による術式の施された物を法具と呼称する訳だが、その彼らが使う法具は、古代文字による術式を組み込むことによって発動する魔法を選択する。

それが『法師専用法具（ハイレシス）』と呼ばれるものであり、

法師として卓越した古代文字の知識と魔法学の理論が頭になければとても使いこなすことは出来ない。使用する場合も、呪文を唱えたり、その場に陣を描いたりするものではなく、マナを注ぎつつ『念じる』ことにより魔法を発動する。

無論、呪文や陣によりハイレシスに力を付加することは可能だが、戦闘中では無駄が多いし、それなら複数の法具を持っていた方が効率的だ。それでも複数の法具を持つことは法師としての未熟さをそのままさらけ出すのに等しく、やろうとする法師はまずいない。

そして、念じるという作業は言葉にするよりも複雑な作業であり、ハイレシスは法師しか扱わない。もちろん極稀に例外も存在する。

ハイレシスは使い手を選びはするが、臨機応変な魔法の選択が可能であるために、優秀な法師は戦闘に関しても、その道のスペシャリストである騎士を凌ぐとまでいわれている。

彼女の属性色は『白』。

その特性は治癒や防護に特化している。六色の中では『黒』と同様に希少な属性色であり、優秀な医者などに多いとされる。優秀な医者が『白』なのか、『白』だから優秀な医者のか、ということが時折議論の場に持ち出されることもあるほどだ。

そして彼女のハイレシスである白いチョーク『テミス』も彼女の色を生かすべく作られた『オリジナル』だ。攻撃に使用することもできるが、本来の用途は防御結界を張ることに特化している。

あのとき、男子生徒の口は動いていた。

「せん……せい……みんなを……まもってね……」
実際にテレサは彼を守れなかった……。
その彼が最後に本当は何て言ったのか――それはわからない。
自分が生きるための都合の良い口実と言われてしまえば言い返すことは出来ない。
でも、目の前には苦しみ、恐怖に顔を染める生徒たちがいる。
勇敢なあの男子生徒の遺言ともとれる言葉を、
まだ『生きている』テレサが無視していいはずがない。
「私の力は生徒を守るためのもの。ドラゴンを倒すためのものじゃない」
テレサは光のヴェールとドレスに姿を変えた結界を纏いながら頭上のリザードの口に挟まった杖を抜き取る。そしてそのまま咥内めがけて雷の矢を放つ。分厚い鱗に覆われていない体内でのゼロ距離射撃に流石にリザードが怯むとスロウの法具『ベルフェゴール』の白い刃がまたもリザードの首を切断する。
スタジアムに転がるリザードの死体の向こうからスロウがテレサに近づいてくる。
「やっとわかったか、まったく、めんどくさいやつだな」
「ごめんんさい……」
「まったく……学年主席が聞いてあきれるな……」
「返す言葉もないわ……」
「……無抵抗だとそれはそれで言いづらい……でも、わかってるだろ？　これで終わりじゃない」
「ええ。それでも、私は……もう自分を見失ったりしないわ」
右手の杖を強く握りしめながらスロウとともに遥か上空を見上げる。
そこにはいままで相手にしてきたリザードより数倍大きな翼を広げ、まるで全ての人間を見下す様に、成体『ワイバーン』がその口

から噴煙を立ち昇らせていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0872w/

セブンス・マーチャント

2011年9月25日12時24分発行